

# 2025 要覧

## 北村山視聴覚教育センター

～ともに育む・学ぶ・創る～

山形県村山市中央一丁目3番6号

〒995-0035 TEL 0237-55-4211 (代表)

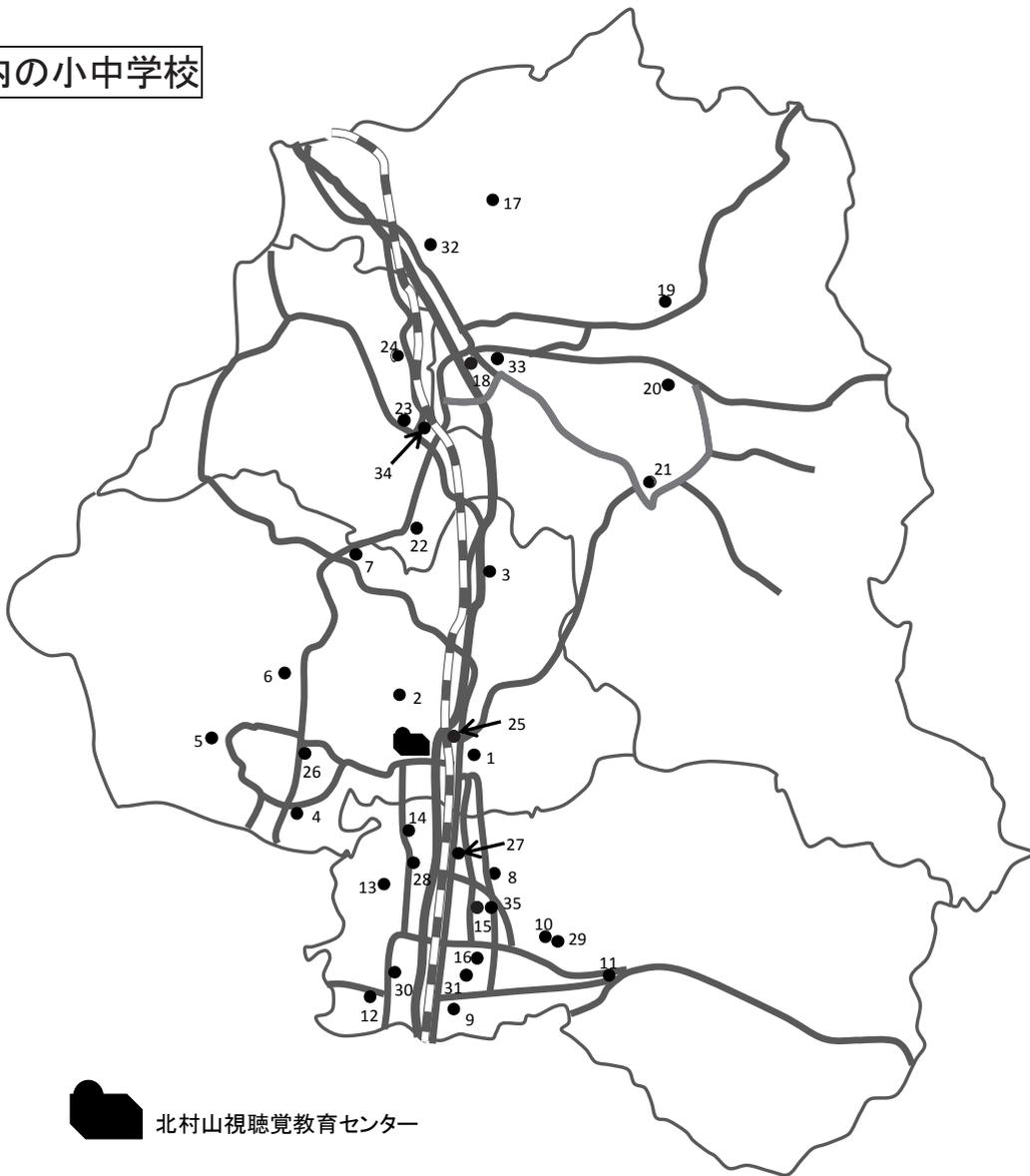
0237-53-0695 (貸出)

0237-53-0696 (広域)

HP <https://www.kavec.ed.jp/>

e-mail [k-center@kavec.ed.jp](mailto:k-center@kavec.ed.jp)

# 北村山管内の小中学校



	No.	村山市	No.	東根市	No.	尾花沢市	No.	大石田町
小 学 校	1	楯岡小学校	8	東根小学校	17	福原小学校	22	大石田南小学校
	2	西郷小学校	9	神町小学校	18	尾花沢小学校	23	大石田小学校
	3	袖崎小学校	10	東郷小学校	19	宮沢小学校	24	大石田北小学校
	4	大久保小学校	11	高崎小学校	20	玉野小学校		
	5	富本小学校	12	大富小学校	21	常盤小学校		
	6	戸沢小学校	13	小田島小学校				
	7	富並小学校	14	長瀬小学校				
		15	東根中部小学校					
		16	大森小学校					

	No.	村山市	No.	東根市	No.	尾花沢市	No.	大石田町	No.	県立中学校
中 学 校	25	楯岡中学校	27	第一中学校	32	福原中学校	34	大石田中学校	35	東桜学館
	26	葉山中中学校	28	第二中学校	33	尾花沢中学校				
			29	第三中学校						
			30	大富中学校						
			31	神町中学校						

(人口は令和7年4月1日現在)

	村山市	東根市	尾花沢市	大石田町	合 計
人 口	21,138	47,437	13,386	5,888	87,849
高 等 学 校	1	1	1	0	3
特 別 支 援 学 校	1	0	0	0	1
図 書 館 等	1	1	1	1	4
公 民 館 等	9	7	6	1	23

# はじめに

昭和46年に北村山3市1町（村山市、東根市、尾花沢市、大石田町）が、広域市町村圏の指定を受けました。

地域の振興は、有能な人材の育成にあるという考え方から、教育関係施設の整備がとりあげられ、圏域小・中学校教職員や社会教育関係者の研修の場、北村山地区視聴覚ライブラリーの充実、将来の視聴覚教育の果たす役割などを検討した結果、昭和49年4月に北村山広域行政事務組合の施設として、北村山視聴覚教育センターが建設され開所いたしました。

以来、プラネタリウムを中心とした移動学習をはじめ、施設設備を活用した研修、研究活動は、着実な進展を見せております。

特に近年は超スマート社会（society5.0）、及びGIGAスクール構想に即応した研修が求められています。需要に応じた学習が展開できますよう、ICTを活用した授業づくりの研修を実施したり、機材教材の更新を適宜行ったりして、視聴覚教育を支援していきたいと考えております。

今後も研修機能の充実、教育情報の積極的な収集と教材化に努め、施設設備の一層の充実と指導体制の確立を図りながら、地域の皆様と「ともに育む・学ぶ・創る」を柱として運営に力を入れていく所存であります。

関係各位のご指導ご支援を賜りますようお願いいたします。

北村山視聴覚教育センター所長

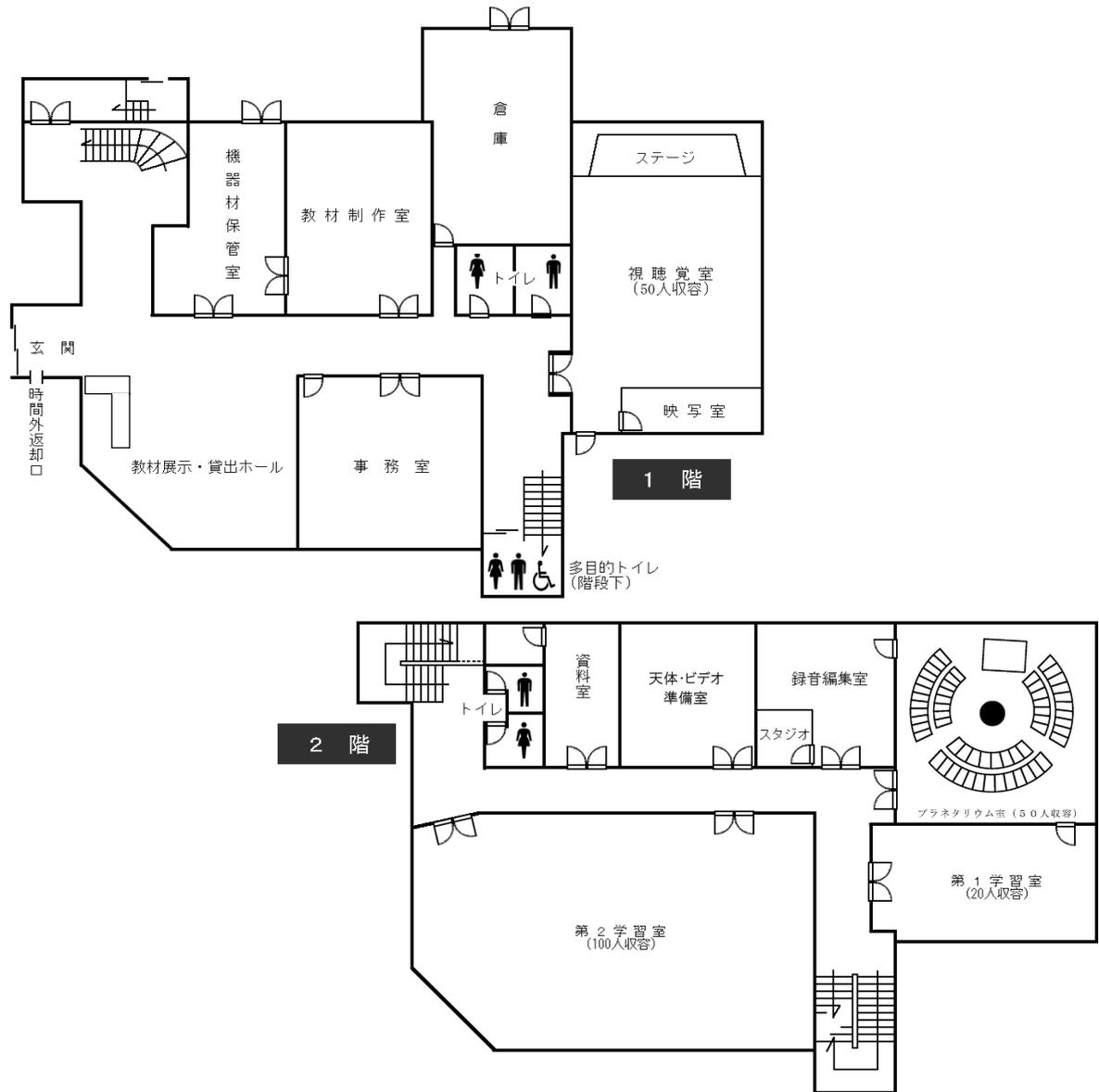
# も く じ

はじめに	3
沿 革	5
施設案内図	6
施設概要	6
組織機構と職員配置図	7
運営方針	8
重点事業	9
予 算	10
事業概要	11
利用案内	14
利用手続き	16
機材、教材の所有状況	17
センター利用関係団体	19
令和6年度のあゆみ	
センター事業スナップ	23
会議の経過等	25
移動学習実績表	26
事業実績	28
自作視聴覚教材の制作	30
センター利用状況	31
機材、教材の整備	33
資料の収集	34
広報、展示他	35
視聴覚教育研究委嘱	
研究のまとめ	39

## 北村山視聴覚教育センター沿革

昭和 28 年	北村山視聴覚ライブラリー協議会結成（学校教育）
昭和 37 年 11 月	北村山地区視聴覚教育協議会発足
昭和 46 年 7 月	北村山広域市町村圏の決定
昭和 46 年 8 月	北村山広域行政協議会の設置
昭和 47 年 3 月	北村山広域市町村圏計画の策定
昭和 48 年 3 月	北村山広域行政協議会の廃止
昭和 48 年 4 月	北村山広域行政事務組合設立
昭和 48 年 9 月	北村山視聴覚教育センター建設着工
昭和 49 年 3 月	北村山視聴覚教育センター完成
昭和 49 年 4 月	北村山視聴覚教育センター開所
昭和 49 年 9 月	小学 5 年生必修天文学習開始
昭和 50 年 11 月	自作ビデオ教材の制作始まる
昭和 51 年 4 月	研究協力校制度始まる
昭和 51 年 5 月	プラネタリウム連絡協議会全国大会開催
昭和 51 年 10 月	東北地区視聴覚ライブラリー研究協議会開催
昭和 53 年 4 月	委嘱研究員制度始まる
昭和 54 年 4 月	財団法人北村山教育会の事務局が北村山視聴覚教育センターになる
昭和 55 年 11 月	1980 年視聴覚教育賞（文部大臣賞）受賞
昭和 57 年 7 月	東北地区視聴覚ライブラリー研究協議会開催
昭和 58 年 11 月	全国自作視聴覚教材コンクールで文部大臣賞受賞
昭和 60 年 7 月	紅花ビデオクラブとの共同制作教材が 1980AVCC 自作視聴覚教材コンクールで文部大臣賞受賞
昭和 63 年 11 月	全国自作視聴覚教材コンクールで文部大臣賞受賞
平成元年	オープン 15 周年記念事業を実施
平成 5 年 11 月	全国視聴覚教育研究会北村山大会の開催
平成 6 年	オープン 20 周年記念事業を実施
平成 7 年 10 月	全国視聴覚センター研究協議会、放送教育東北大会の開催
平成 9 年	全国自作視聴覚教材コンクールに 15 年連続入賞
平成 11 年 10 月	オープン 25 周年記念事業を実施
平成 12 年	北村山視聴覚教育センターホームページ開設
平成 15 年 4 月	機材・教材貸し出し管理バーコードシステム導入
平成 15 年 11 月	全国視聴覚教育連盟創立 50 周年記念事業において特別功労賞を受賞
平成 16 年 7 月	オープン 30 周年記念事業を実施
平成 18 年 1 月	センター大規模改修工事を施工
平成 18 年 9 月	全国自作視聴覚教材コンクールで文部科学大臣賞受賞
平成 20 年 8 月	山形県教育研究所連盟研究発表大会を開催
平成 23 年 1 月	センター利用者 100 万人達成
平成 23 年 4 月	寄附金を基に北村山教育会基金を設立
平成 26 年	オープン 40 周年記念事業を実施
平成 27 年 3 月	サタデープラネタリウム来館者 3 万人を達成
平成 31 年 3 月	プラネタリウム本体恒星・惑星等投影器光源の LED 化
令和 2 年 3 月	プラネタリウム室椅子リニューアル
令和 2 年 10 月	プラネタリウム室・視聴覚室の空調設備工事
令和 3 年 3 月	北村山視聴覚教育センターホームページリニューアル
令和 6 年	オープン 50 周年記念事業を実施

# 施設案内図



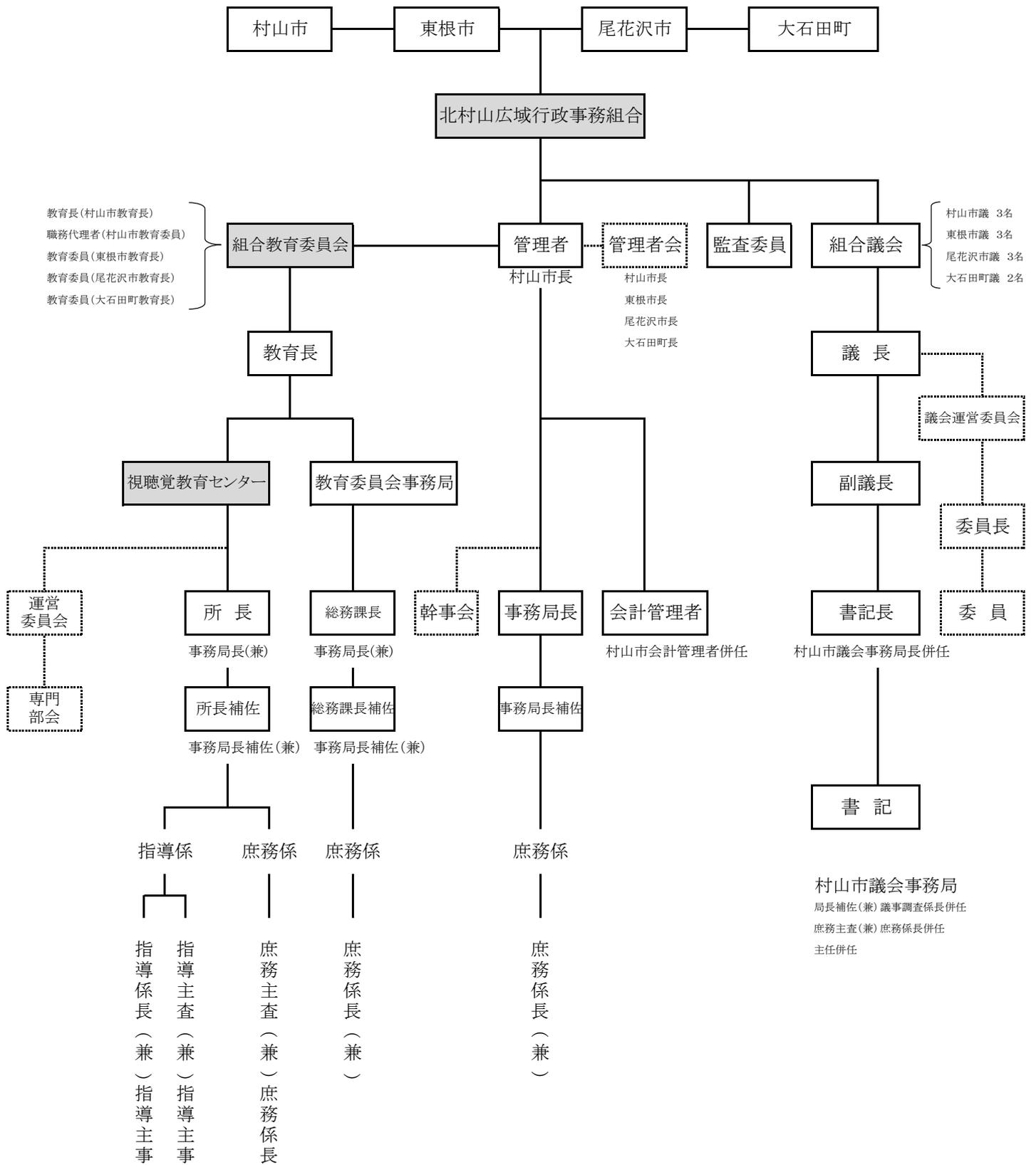
# 施設概要

鉄筋コンクリート2階建、建物総面積 …… 1, 142 m<sup>2</sup>

1階	面積	2階	面積
教材展示・貸出ホール	64.2 m <sup>2</sup>	第1学習室	49.5 m <sup>2</sup>
機器材保管室	42.0 m <sup>2</sup>	プラネタリウム室	81.0 m <sup>2</sup>
教材制作室	56.9 m <sup>2</sup>	録音編集室	39.0 m <sup>2</sup>
事務室	60.8 m <sup>2</sup>	天体・ビデオ準備室	39.0 m <sup>2</sup>
視聴覚室	119.0 m <sup>2</sup>	資料室	25.4 m <sup>2</sup>
倉庫	50.0 m <sup>2</sup>	第2学習室	171.3 m <sup>2</sup>

別棟：車庫（バス1台、公用車2台） …… 116 m<sup>2</sup>

# 組織機構と職員配置図



## 運 営 方 針

北村山広域市町村圏の子供たちが、超スマート社会（Society 5.0）において、AI や VR 等の最先端の科学技術を駆使して多様性あふれる持続可能な社会を構築するとともに、これらの技術を正しく使い、社会全体のウェルビーイングの向上に寄与しようとする姿の育成を目指し、GIGA スクール構想の第2期（「Next GIGA」）に即した視聴覚教育（ICT 教育）を促進・支援し、教育方法と指導内容の改善充実に努めるとともに、教育の情報化の進展を図る。

### 1 研究と研修活動

学校教育・社会教育等に関する教育メディア活用の研修を計画的に開催するとともに、適宜相談に応じて指導助言を行う。

また、各種事業を通して視聴覚教育に関する調査研究を行う。

### 2 学習情報の提供

学校教育・社会教育等に必要な新しい教育メディアの収集や、地域性を生かした教材の制作を行い、利用者に提供する。

### 3 施設利用の学習

施設利用学習については、利用者それぞれの教育目標の達成のために効果的に行われるように努める。

また、学校教育・社会教育関係者等が自主的に研修する場として施設を提供する。

### 4 連絡提携と広報活動

視聴覚教育センターの機能を周知し利活用していただくため、また事業について参加をしていただくために、行政機関、学校教育関係機関、社会教育関係団体、地域団体等と連絡提携を図るとともに、SNS、マスメディア等を活用して積極的に広報活動を行う。

## 令和7年度重点事業

### 1 研究と研修活動の充実

- (1) 視聴覚教育委嘱研究事業
- (2) ICT 教育推進事業（各種研修事業）
- (3) 移動学習

### 2 視聴覚教材の制作、活用、保存活動の充実

- (1) 視聴覚教材制作推進事業
- (2) 公式 YouTube チャンネルを利用した視聴覚教材の保存・アーカイブ化
- (3) 16 mm フィルムの活用と保存

### 3 一般公開の充実

- (1) 幅広い層を対象としたイベントプラネタリウム
- (2) 関係団体との積極的な連携

予 算
--------

### 1 歳入

(単位；千円)

区 分	令和7年度	令和6年度
負 担 金 等	63,004	61,716
国・県補助金	0	0
その他（使用料等）	57	16
歳 入 合 計	63,061	61,732

### 2 歳出

(単位；千円)

区 分	令和7年度	令和6年度	
報 酬	5,692	5,468	
給料諸手当	30,980	30,536	
報 償 費	439	402	
旅 費	1,146	973	
交 際 費	10	10	
需 要 費	消耗品費	1,104	1,173
	燃 料 費	476	453
	食 糧 費	27	31
	印刷製本費	868	1,426
	光熱水費	4,396	4,395
	修繕料	1,350	1,080
役 務 費	677	625	
委 託 料	5,411	5,103	
使用料及び賃借料	7,658	6,377	
工事請負費	1,730	2,970	
原 材 料 費	30	30	
備品購入費	960	573	
負担金補助及び交付金	72	72	
補償補填及び賠償金	20	20	
公 課 費	15	15	
歳 出 合 計	63,061	61,732	

## 事業概要

	事業名	期日	対象	内容	
施設運営	運営委員会	5月 2月	運営委員	・運営委員会を年2回開催し、センターの運営・事業内容等に対する意見交換や検討を行う。	
	専門部会	学校教育専門部会	随時	学校教育専部員	・各市町より推薦された5名の教員と、管内の指導主事4名が部員となる。 ・視聴覚教育に関する調査研究を行う。 ・センター事業(委嘱研究、各種研修会等)への参加。
		社会教育専門部会	随時	社会教育専門部員	・各市町より推薦された5名の社会教育関係職員が部員となる。 ・視聴覚教育に関する調査研究を行う。
研究と研修活動	委嘱研究	教材研究、指導・助言	年間	委嘱研究員	・研究員(各市町1名ずつ)を委嘱し、ICT機器を活用した効果的な学習指導法の開発研究や、プログラミング教育の実践研究を推進する。 ・研究を進めるにあたって、年間を通して授業づくりや教材等の研究の指導・助言を行っていく。
		授業研究会	研究員一人につき1回	委嘱研究員、教職員	・委嘱研究員一人につきICT機器を活用した年間1回の授業公開を行い、その効果等について授業をもとに検証する。
		外部研修会等への参加の奨励	1回程度	委嘱研究員	・委嘱研究員に外部の研修会(公開授業及び先進校視察等)への研修会への参加を促し、研究の一助とする。
		成果発表会	2月中旬	委嘱研究員、教職員	・研修の成果を発表する場を設け、管内に広くその成果を公開する。 ・北村山地区小中学校教育研究会メディア教育部会との共催で行う。
		ICT活用事例集等への報告	3月	委嘱研究員	・研究の成果をICT活用事例集等へ報告し、管内に広くその成果を公開する。
	移動学習	天文教室	年間	幼保施設、小中学校	・プラネタリウム投影を行い、天文教育と情操教育に役立てる。
		映画教室	年間	幼保施設、小中学校	・視聴覚教材の上映を行い、各種学習に役立てる。
		プログラミング教室	年間	幼保施設、小中学校	・プログラミング学習の初期指導や、MESHセンサーを使った学習の実施、補助を行う。
	研修会	小中学校情報教育研修会	5月20日	教職員	・情報教育や情報管理に関する研修。
		視聴覚教育講演会	7月2日	教職員	・視聴覚・情報教育に関して、外部講師による講演会を実施する。 講師: 中京大学 教養教育研究院 泰山 裕 教授
		施設単位講習会	年間	児童生徒、教職員、社会教育団体	・センター職員が学校や施設に出向き、ICTやAIの活用、情報モラル学習、プログラミング学習等、各学校や施設・団体で希望する内容について、教職員や社会教育団体を対象とした講習会を実施する。
		校務の情報化事業に基づく校務用アカウントの整備	年間	教職員	・北村山一体として学校教育の情報化を推進するため、北村山地区の全ての教職員に統一ドメイン(@koumu.kitamurayama.ed.jp)のアカウントを発行し、校務におけるコミュニケーションツールの一つとしてMicrosoft Teams for Educationを使用できる環境を整える。
	視聴覚教材制作・保存活動	北村山地区自作視聴覚教材コンクール	審査会 11月中旬 表彰式 12月中旬	学校・社会教育関係者、一般	・学校教育、社会教育の分野で自作視聴覚教材の制作を奨励し、制作技術の向上を図る。 ・審査会と表彰発表を行う。
自作視聴覚教材の制作		随時	-	・地域の伝承行事、伝統芸能、音楽会、記念行事等を映像資料として記録保存し、学習素材としても提供する。 ・県自作視聴覚教材コンクールへの出品を行う。	
自作視聴覚教材のアーカイブ化		随時	-	・自作視聴覚教材を中心に公式Youtubeチャンネルにアップロードし、広く映像資料を提供する。	

	事業名		期日	対象	内容	
情報提供活動	要覧(研究集録含む)の発行		5月	-	・センター利用案内、事業、委嘱研究のまとめ等を集録し、関係機関に配布する。	
	資料の収集、提供		随時	-	・最新の動向に注目して情報や資料の収集に努め、教育実践に役立てる。 ・専門図書、指導事例集等の資料収集。館内での閲覧が可能。 ・各校から提供いただいた学校要覧・研究紀要・学校文集等についてセンターで保存する。	
一般公開	天文関係	イベント プラネタリウム	春のうたたね プラネタリウム	5月	一般	・朗読とプラネタリウムのコラボレーション企画
			七夕観望会	7月		・センター利用関係団体「プラネタリウム・スペース・クラブ」と「北村山天文愛好会」の協力を得て、特別なプラネタリウムの上演とセンター屋上での天体観望を行う。
			熟睡プラネタリウム	11月		・勤労感謝の日に合わせ睡眠をテーマにしたプラネタリウム企画
			怪談プラネタリウム	12月		・怪談とプラネタリウムのコラボレーション企画 ゲスト:黒木 あるじ 氏
			ミュージックプラネタリウム	3月		・音楽とプラネタリウムのコラボレーション企画
	会員制親子星空教室 スターウォッチングクラブ		年4回	小学生 1~6年 (40名)	・天文情報の送付、合同学習会、観望会を行い、天文愛好者の育成と天文普及を図る。 ・センター利用関係団体「北村山天文愛好会」の協力を得て、天体観望を行う。	
	視聴覚関係	映画の日	7月	一般	・普段の一般公開では上映できない長編映画や、貴重な16ミリフィルム映画の上映。	
レトロ月間(16ミリフィルム)		8~9月	・土曜開館に合わせ、16ミリフィルム映画を一般に公開する。			
土曜一般公開 (映画・プラネタリウム)		土曜開館に 合わせて (※1)	一般	・土曜開館に合わせ、地域住民にセンター機能を開放するため、プラネタリウムと映画を一般に公開する。 (※1) 映画 10:00~10:25 プラネタリウム 10:40~11:20		
施設利用	土曜開館		設定日	一般	・開館日は年間30日程度。開館時間は8:30~12:30。 ・地域住民に学習室や教材制作室を開放する。	
	研修会場の提供		随時	学校・社会教育関係者、一般	・学校教育、社会教育関係者に計画的、自主的な研修、研究の場を提供する。	
	教科書センターの運用		年間	教職員、一般	・教科書センターとして、教科書の保管(現行2部、旧版1部)を行う。 ・村山教育事務所と連携し教科書展示会(6月中旬)を行う。	
	絵画作品等の展示		年間	教職員、一般	・「北村山子ども美術展」の特別賞受賞作品を展示する。(北村山地区小中学校造形部会との連携)	
機材・教材利用	機器材・教材の購入 貸し出し		随時	学校・社会教育関係者、一般	・小中学校、社会教育団体等で利用する視聴覚機器材、教材を整備し、学校、団体等に提供する。 ・16ミリ映画、DVD等の教材や、映写機、カメラ等の機器材の購入と貸し出し。	
	機器材、教材等の利用記録		随時	-	・機材、教材等の利用状況をまとめ、センターの整備計画等の参考とする。	

	事業名	期日	対象	内容
連絡提携	教育委員会等との連携	年間	教育委員会	・北村山地区内各市町教育委員会及び村山教育事務所と連携し、円滑なセンター運営を図る。
	各協議会・団体との連携	年間	各協議会・団体	・各協議会および団体等と連携し、円滑なセンター運営を図る。 ①北村山地区指導主事連絡協議会 ②市町村教育委員会指導主事連絡協議会 ③全国公立視聴覚センター連絡協議会 ④全国視聴覚教育連盟 ⑤日本教育工学協会 ⑥山形県プラネタリウム連絡協議会 ⑦日本プラネタリウム協議会
	センター利用関係団体との連携	年間	センター利用関係団体	・センター利用関係団体にセンター機能を開放し、育成と資質の向上を図る。 ①北村山天文愛好会 ②紅花ビデオクラブ ③北村山マイコンクラブ ④プラネタリウム・スペース・クラブ
広報活動	チラシによる広報	年6回発行	管内幼保施設、小中高等学校、周辺文化施設、センター運営委員、広域議員、広域教育委員	・表面に「土曜開館お知らせ」、裏面に「各種イベント」(観望会、イベントプラネタリウム等)のチラシを作成し、管内の幼保施設、小中学校等に配布し、センター事業の広報に努める。
	メールマガジンやLINE等による広報	チラシ発行に合わせて	希望者	・メールマガジンやLINEを効果的に活用し、開館情報や、一般公開情報、研修会情報等を広く告知する。
	ホームページを活用した情報発信	随時	一般	・ホームページを活用し、各種情報を発信する。

## 利 用 案 内

### 1 研究、研修活動

施設を利用して次のような研究、研修活動を行うことができます。また、必要に応じて指導、助言を行っています。

- (1) 視聴覚教育に関する研究、研修活動
- (2) 視聴覚教材の制作に関する研究、研修活動
- (3) 各種機材の操作に関する研究、研修活動

### 2 移動学習

天文教室や映画教室、プログラミング教室、情報モラル教室などの学習ができます。大型バスでの送迎も行っています。

- (1) 幼保施設、小中学校の移動学習
  - ア 天文教室では、プラネタリウムを使い、星の明るさと色の違い、時間の経過による見える位置の変化、各季節の代表的な星座についての学習が行えます。
  - イ 映画教室では、BD・DVD教材の上映が行えます。
  - ウ プログラミング教室では、タブレット端末とプログラミング教育用教材（センサー等）を用意しており、プログラミングに関する学習が行えます。
- (2) 社会教育団体での利用
  - ア 子供会、学童保育所、婦人会、高齢者団体、公民館の研修などで利用できます。

### 3 教材の制作

センター所有の機材を利用して、映像や音声の編集を行い、視聴覚教材を制作することができます。

- (1) 視聴覚教材の制作
  - ア 編集用ソフトウェアが入っているコンピュータを利用して、映像教材や音声教材の編集ができます。
  - イ 専用の機器を利用して、教材として制作されたBD・DVD・CDを複製できます。ただし、著作物の複製はできません。
- (2) 大判印刷物の制作
  - ア 拡大印刷ができます。（最大サイズ A1）
  - イ 横断幕・垂幕の印刷ができます。（最長サイズ 9m）

### 4 施設利用

構成市町の各教育委員会、各小中学校、学校教育関係機関、社会教育関係機関、公益団体、官公庁による研修会で、施設内の各部屋を利用できます。

- (1) 第1学習室
- (2) 第2学習室
- (3) 視聴覚室
- (4) プラネタリウム室
- (5) 教材制作室
- (6) 録音編集室

## 5 教材・機材の貸出

### (1) 貸出対象について

- ア 教材は、北村山地区内の学校教育関係機関、社会教育関係機関等の団体、および北村山地区内に住所を有する個人に対して貸出します。
- イ 機材は、北村山地区内の学校教育関係機関、社会教育関係機関等の団体に対して貸出します。

### (2) 貸出できる教材・機材の種類

機材	・16mm映写機 <sup>(※1)</sup> ・スライド映写機 ・DVDプレーヤー ・ビデオカメラ ・スクリーン ・ビデオプロジェクター ・音響装置 ・その他
教材	・16mmフィルム教材 <sup>(※1)</sup> ・スライド教材 ・DVD、BD教材 <sup>(※2)</sup> ・LD教材 ・紙芝居教材

※1 16mm映写機や16mmフィルム教材の貸出時は、15分程度の操作講習を受けていただきます。

※2 北村山視聴覚教育センターで制作した自作視聴覚教材や映像資料等のDVDは、構成市町の各図書館に置かせていただいております。

### (3) 貸出期間と貸出数

- ア 貸出期間 … 7日以内
- イ 貸出数 … 5点以内(教材)

### (4) 利用の方法

- ア 電話または窓口にて、ご利用されたい教材・機材をお伝えください。
- イ 借用・返却時は、直接センターにおいでください。(DVDは返却ポストを設けています。)
- ウ 返却時は「利用報告書」に利用状況を記入してください。

## 6 学習情報の提供

教育関係や天文関係の専門図書、ICT活用事例集等の資料が閲覧できます。また、当センターは教科書センターの役割を担っており、各出版社の教科書の閲覧に加え、指導者用及び学習者用デジタル教科書の操作体験が可能です。

なお、北村山地区内の各学校からご提供いただいた学校要覧や研究紀要、文集等もセンター内で保管していますが、閲覧については制限があります。

## 7 ホームページ等による情報提供

### (1) 公式ホームページでの情報提供

- ア 研究及び研修に関する情報
- イ 一般公開に関する情報
- ウ 所有する視聴覚教材・機材の検索
- エ 自作視聴覚教材アーカイブス
- オ デジタル理科教材

### (2) 公式LINE、メールマガジンでの情報提供

- ア 一般公開に関する情報
- イ 天文に関する情報

### (3) 公式YouTubeチャンネルでの情報提供

- ア 自作視聴覚教材の公開
- イ 一般公開等の記録映像の公開

## 利 用 手 続 き

### 1 利用時間

平 日 8時30分 ～ 17時15分  
(※土曜一般公開設定日 8時30分 ～ 12時30分)

### 2 休館日

- (1) 日曜日及び土曜日
- (2) 国民の祝・休日
- (3) 年末年始休み(12月29日～1月3日)
- (4) その他必要に応じて定める臨時休館日

### 3 センター使用許可範囲

北村山地区内の教育委員会、小中学校、教育関係機関、社会教育関係機関、公益団体、官公庁、その他、特に必要と認めたものが使用するもので、団体及び所属長の申請によるもの。

### 4 プラネタリウム使用料

- (1) 小中学校児童生徒、幼保 ……………1人1回 50円
- (2) 高等学校生徒以上 ……………1人1回 110円

次に掲げる場合は、上記の使用料を免除(減免)します(条例施行規則第3条)

- (1) 北村山地区内市町の職員及び公益団体、官公庁、その他特に必要と認めたものが使用するもので、団体及び所属長の申請によるもの。
- (2) 北村山地区内教育関係機関及び社会教育関係団体等が使用するもので、機関・団体等の長の申請によるもの。  
以上は、1回につき20名以上とする。(ただし、2団体の積算でもよい。)
- (3) 北村山地区内幼保施設、小中学校等の幼児、児童生徒が使用するもので、当該施設、学校等の長の申請によるもの。

### 5 移動学習送迎用バスの使用

- (1) 北村山視聴覚教育センターの移動学習を利用する地区内小中学校児童生徒を原則とし、状況により関係市町、管内各教育委員会、教育関係機関、幼稚園・保育園等の幼保施設、社会教育団体、その他特に必要と認めたものが使用する。
- (2) 運行区間は、センターと地区内小中学校、各幼保施設、公民館(地区公民館を含む)、関係市役所、町役場及び本教育委員会が、特に必要と認めた区間とする。
- (3) 送迎バスを利用する場合は使用日の前月15日までに規定の用紙で申し込む。ただし、緊急の場合はこの限りではない。

## 機材・教材の保有状況

### 1 貸出用機材 ( ) 内は個数

16 ミリ用映写機	クセノンタイプ(3) 映写台(2)
スライド映写機	サウンド付き(1)
ビデオカメラ	デジタルビデオカメラ(4) ビデオ用三脚(8)
デジタルカメラ	デジタルカメラ(6)
音響機器	ワイヤレスアンプ(2) キャリングアンプセット(3) ポータブルPAシステム(1) ホーン型スピーカー(1) スピーカーケーブル50m(4) CD付きラジカセ(1) トランシーバ(4)
プロジェクター	62001m(2) 50001m(1) 短焦点型3001m(2) DVDプレーヤー一体型26001m(2)
スクリーン	布スクリーン(3) 自立式(7)
マイク、スタンド他	ボーカルマイク(4) ダイナミックマイク(2) コンデンサーマイク(1) ワイヤレスピンマイク(2) ワイヤレスマイク(2) マイクスタンド(5) 卓上マイクスタンド(1)
コンピュータ機器	BD・DVD・CD複製機(1) HDMIキャプチャ(1) 動画用配信機材セット(2) LANケーブル70m(1) HDMIケーブル10m(4) HDMIケーブル5m(1) HDMI延長アダプタ(2) HDMIエクステンダーセット(2) ノートパソコン(1) 書画カメラ(2)
展示用パネル	展示用パネル(7) 一字型パネル足(8) 十字型パネル足(4)
マイクケーブル	マイクケーブル(10)
その他機器材	音声ケーブル(3) 映像音声ケーブル(1) 電工ドラム(6) レーザーポインター(3)

### 2 貸出用教材

16 ミリ映画	520 本
スライド・紙芝居	91 組
LD・DVD教材、コンピュータソフト教材	2,042 枚

貸出教材・機材の最新の状況は、ホームページの「教材・機材検索」からご確認いただけます。

### 3 施設内の機器材

教材展示室	ディスプレイ型電子黒板 (65 インチ) 視聴コーナー (DVD プレーヤー、モニター)
機器材保管室	16 ミリフィルム検査機 紙折り機 裁断機
視聴覚室	16 ミリ映写機 BD・DVD プレーヤー アンプ モニター
教材制作室	教材制作用コンピュータ BD・DVD・CD 複製機 研磨機 フィルム対応スキャナー レーベルプリンター 大判プリンター 各種再生機 (DVD、BD、LD、VHS 等) 液晶テレビ
天体・ビデオ準備室	業務用ビデオカメラ 業務用三脚 天体望遠鏡 反射望遠鏡 大型双眼鏡
録音編集室	アンプ スピーカー ミキサー カセットデッキ CD プレーヤー トレース台 液晶テレビ
プラネタリウム室	プラネタリウム (コニカミノルタ製 MS-8 LED) 回転スライド ズームスライド 星座絵 流星 火球 太陽 月位相 オーロラ 音響装置 PC プロジェクター CD プレーヤー DVD・BD レコーダー
第1学習室	ディスプレイ型電子黒板 (65 インチ)
第2学習室	プロジェクター型電子黒板 ディスプレイ型電子黒板 (80 インチ) プロジェクター DVD・BD レコーダー 音響設備 学習用タブレット PC (40 台) 研修用ノート PC (10 台)
車庫	バス (1 台) 公用車 (2 台)

## センター利用関係団体

	名 称	結成年月	会 長	会員数	主 な 活 動
1	北村山天文愛好会	昭和51年7月	寒河江 秀壽	65人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 共同観測会、星空キャンプ</li> <li>・ フィンランド製ログハウスでの 会員親睦会</li> <li>・ 天文写真撮影</li> <li>・ 地域の観望会への協力</li> <li>・ ブログやSNSでの情報発信</li> <li>・ 高冷地野菜や山菜の収穫体験</li> <li>・ センター事業への協力</li> </ul>
2	プラネタリウム・ スペース・クラブ	昭和56年4月	高 嶋 和 夫	10人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プラネタリウム番組の制作</li> <li>・ 他施設への見学や研修</li> <li>・ センター事業への協力</li> </ul>
3	紅花ビデオクラブ	昭和59年3月	(事務局) 原 田 成 夫	12人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 映像コンテンツの制作</li> <li>・ 研修会の実施</li> <li>・ センター事業への協力</li> </ul>
4	北村山マイコンクラブ	昭和59年4月	日 塔 常 喜	18人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コンピュータ利用の研究実践</li> <li>・ デジタル教材の制作</li> <li>・ 情報交換</li> <li>・ センター事業への協力</li> </ul>



# 令和6年度のあゆみ



# 2024年センター事業スナップ

## 委嘱研究事業



委嘱研究授業研究会(西郷小)

## 移動学習



プログラミング学習

## 各研修事業



視聴覚教育講演会  
講師 放送大学 小林祐紀 准教授

## 視聴覚教材制作推進事業



北村山地区自作視聴覚教材コンクール

## スターウォッチングクラブ



恒星や惑星の観望会を実施  
(協力 北村山天文愛好会)

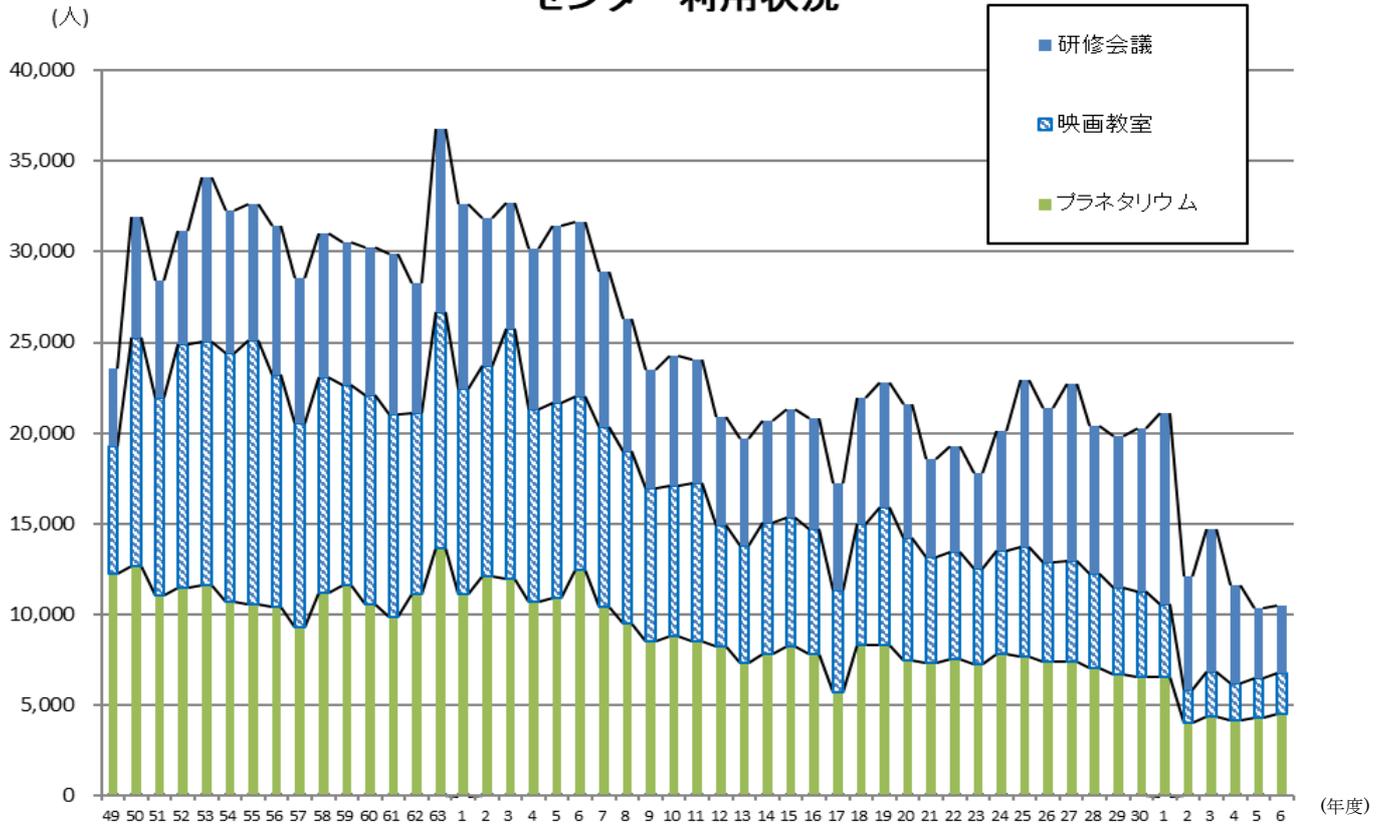
## イベントプラネタリウム



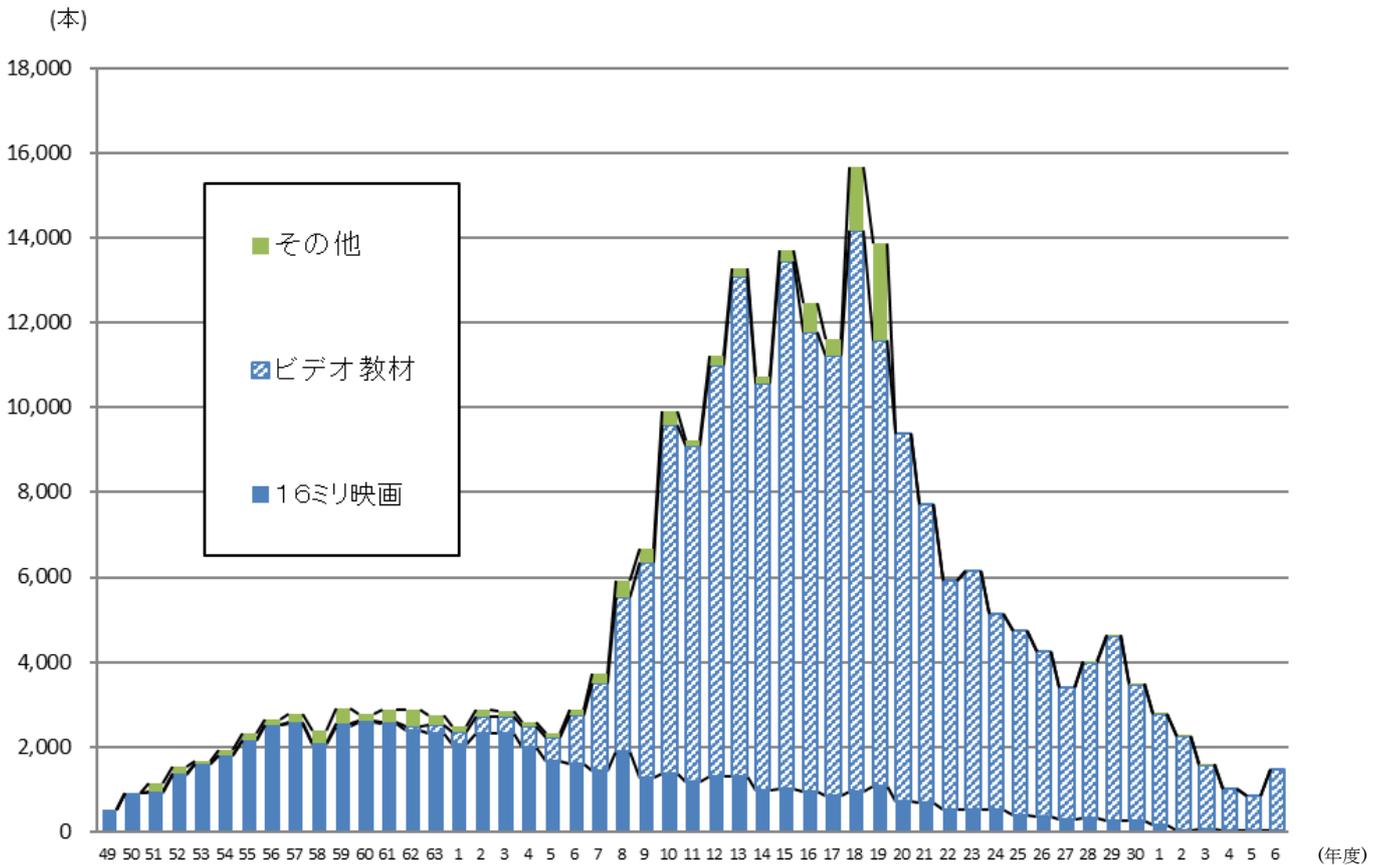
センター開所50周年記念プラネタリウム  
(協力 プラネタリウム・スペース・クラブ)

開所からの利用状況（昭和49年～令和6年度）

センター利用状況



教材別利用状況



## 会議の経過等

### 1 運営委員会

回	期 日	内 容
第1回	令和6年 5月31日	・令和6年度センター事業計画について
第2回	令和7年 2月20日	・令和6年度センター事業報告 ・令和7年度センター事業計画について

### 2 各専門部会

#### 《学校教育専門部会》

回	期 日	内 容
第1回	令和6年 5月27日	・今年度の事業計画について
第2回	令和6年 8月9日	[オンライン会議] ・デジタルシティズンシップ教育及び端末の持ち帰りに係る調査研究活動について
第3回	令和7年 2月17日	[オンライン会議] ・令和6年度センター事業報告と令和7年度センター事業計画について ・デジタルシティズンシップ教育及び端末の持ち帰りに係る実践報告

#### 《社会教育専門部会》

回	期 日	内 容
第1回	令和6年 5月27日	・今年度の事業計画について
第2回	令和6年 6月17日	・令和6・7年度に制作する視聴覚教材のテーマについて
第3回	令和6年 8月29日	・自作視聴覚教材の制作に係る各市町の進捗状況の確認

### 3 視聴覚教育委嘱研究

回	期 日	内 容
第1回	令和6年 5月22日	研修会 ・1年次の研究の進め方について
第2回	令和6年 9月10日	公開授業研究会① 村山市立西郷小学校 杉原 祐美 教諭（1年次） 「より豊かな表現を目指すためのICT活用」
第3回	令和6年 10月18日	公開授業研究会② 大石田町立大石田南小学校 小玉 絃貴 教諭（1年次） 「ICT活用を通して児童が自ら課題意識をもち、情報活用能力を高める授業実践」
第4回	令和6年 11月29日	公開授業研究会③ 東根立長瀬小学校 柏倉 雄太 教諭（1年次） 「特別支援教育（情緒学級）における学びの個別最適化を図るためのICT活用」
第5回	令和6年 12月11日	公開授業研究会④ 尾花沢市立尾花沢小学校 青柳 道彦 教諭（1年次） 「三つの『コ』を育成するために効果的なICT活用～『セルフコントロール力』 『コミュニケーション力』『コラボレーション力』の育成～」
第6回	令和7年 2月12日	視聴覚教育委嘱研究1年次発表会

### 【資料3】 移動学習実績表

小・中学校 91回 (106回)

管内幼保施設 35回 (35回)

社会教育施設等 24回 (18回)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
4月	午前																
	午後																
		月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	
5月	午前																
	午後																
		水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	
6月	午前					小田島小 5年1組	播磨特別支援 2年1・2・A組					玉野小 1年生			県立新庄養護 学校中学部 2年生		
	午後																
		土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	
7月	午前	東根中部小 4年1組	東根中部小 4年2組	西郷小 2年1組		大石田 保育園				常盤小 4・5年生	富並小 3・4年生	戸沢小 4年1組	大石田小 4年1組	常盤小 1～3年生			
	午後	小田島小 4年1組①	長瀬小 4年1組										福原小 6年生				
		月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	
8月	午前	尾花沢放課後 児童クラブ 1～5年生①	ふたば袖崎 保育園 年長			尾花沢放課後 児童クラブ 1～5年生②	大けやき学童 クラブ 2年生①	大けやき学童 クラブ 2年生②	尾花沢放課後 児童クラブ 1～5年生③	フラット こいな							
	午後	高崎学童クラブ 1～3年生					尾花沢地区 公民館	童心クラブ 4～6年生		横山児童クラブ 4～6年生							
		木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	
9月	午前		福原小 1年生	福原小 2年生	袖崎小 1年生	玉野小 6年1組	大石田南小 1・2年生				神町小 4年1組	神町小 4年2組	宮沢小 2・3年生				
	午後					大石田南小 3・4年生	大石田南小 5・6年生										
		日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
10月	午前			よつば こども園	こども園 ときわ保育			おもたか保育園 玉野保育園	学童クラブ D-ほけっと	ふたば横山 保育園	ふたば 保育園	大石田 保育園					
	午後															ひまわり 保育園	
		火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	
11月	午前	ふたば大高根 保育園				なかよし保 育園	ふたば袖崎 保育園	ひがしね 幼稚園①	長瀬児童 センター				大ケヤキ 中央保育所	ひがしね こども園	東部 こども園		
	午後						西郷小 5年1組	福原小 6年生					福原小 5年生	富並小 5・6年生			
		金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	
12月	午前		播磨小 6年2組	常盤小 6年生	袖崎小 4年生	富本小 5・6年生	西郷小 6年1組				播磨小 6年1組	富本小 1・2年生	播磨小 5年1組		河北幼稚園 年長		
	午後				宮沢小 5・6年生	長瀬小 6年生							宮沢小 4年生				
		日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
1月	午前						大石田小 4年1組										
	午後																
		水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	
2月	午前					大富小 5年1組	戸沢小 3年1組		長瀬南十字 サロン			西郷小 1年1組			はやま認定こども 園子育て支援セン ターぐんぐん		
	午後																
		土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	
3月	午前																
	午後					河島山 シニアクラ ブ											
		土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	

管外施設 5回 (4回)

合計 155回 (157回)

( )内は前年同期比

令和7年3月31日現在

16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	
木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
		おちやのんで家	高崎小4年生	東郷小4年1組	大石田小2年1組				大石田小1年1組	東根中部小4年3組	宮沢小1年生				
									大森小4年1組①	大森小4年2組①	大森小4年3組①				
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
東根小4年3組	榑岡小4年1組	榑岡小4年2組	榑岡小4年3組			東根小4年1組	東根小4年2組						大げやき学童クラブ3年生①	大げやき学童クラブ3年生②	放課後DSたいよう
	尾花沢小4年1組	尾花沢小4年2組	たかだま幼稚園			河北幼稚園年長									高崎学童クラブ4~6年生
火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水
			童心クラブ1~3年生		かりがね児童クラブ	福原小3年生	まちなつと神町			玉野小2年1組	戸沢小1年1組	大石田北小1~3年生	戸沢小2年1組	西郷小4年1組	
			放課後等DS大げやき	横山児童クラブ1~3年生	玉野小3年1組	玉野小5年生	やなぎさくら会			大久保小4年1組	大石田北小4~6年生				
金	土	日	月	火	水	木	火	土	日	月	火	水	木	金	土
	袖崎小2・3年生							富並小1・2年生	大石田小3年生	富本小3・4年生				福原小4年生	
月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	
	榑岡幼稚園				西郷認定こども園	はやま認定こども園		ひばり保育園	しょうよう保育園			神町幼稚園①	あおぞらこども園	さくらこども園	ひまわり幼児園
水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木
		おおとみ保育園	認定こども園おだしま	さくらんぼ保育所	尾花沢幼稚園	神町保育所			ひがしね保育所	輝認定こども園		東根市適応指導教室			
						神町小特別支援級									
土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	
西郷小3年1組	榑岡小5年2組	袖崎小5・6年生	榑岡小6年3組	河北幼稚園年中・年少					ままらんぼ母親クラブ						
	榑岡小5年3組		小田島小4年1組												
月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
大富小6年生	大富小4年1組			神町幼稚園②	高崎小5・6年生		大石田小6年1組								ひがしね幼稚園②
					長瀬小5年1組							大森小4年2組②		大森小4年3組②	大森小4年3組②
木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
		大石田小5年生			戸沢小5年生				戸沢小6年生						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月

# 事業実績一覧

(令和7年3月31日現在)

	事業名	期日	対象	参加人数	内容	
施設運営	運営委員会	5月31日 2月20日	運営委員会 委員	21人 20人	・センターの運営・事業内容等に対する意見交換及び検討を行った。	
	専門部会	学校教育	5月27日 8月9日 2月17日	学校教育 専門部員	8人 7人 9人	・部員は各市町より推薦された教員(5名)と指導主事(4名)。 ・学習者用端末の有効利用に関する調査・研究を行った。
		社会教育	5月27日 6月17日 8月29日	社会教育 専門部員	4人 4人 4人	・部員は各市町より推薦された社会教育関係職員(4名)。 ・「地域の産業」をテーマにした自作視聴覚教材の立案、取材、映像制作等を行った。
研究・研修活動	委嘱研究	授業研究会	委嘱研究員 教職員	9月10日	11人	・杉原 祐美 教諭(村山市立西郷小学校) 『より豊かな表現を目指すためのICT活用』
				10月18日	11人	・小玉 絳貴 教諭(大石田町立大石田南小学校) 『ICT活用を通して児童が自ら課題意識をもち、情報活用能力を高める授業実践』
				11月29日	12人	・柏倉 雄太 教諭(東根市立長瀬小学校) 『特別支援教育(情緒学級)における学びの個別最適化を図るためのICT活用』
				12月11日	14人	・青柳 道彦 教諭(尾花沢市立尾花沢小学校) 『三つの「コ」を育成するために効果的なICT活用～「セルフコントロール力」「コミュニケーション力」「コラボレーション力」の育成～』
	成果発表会 (ハイブリッド開催)	2月12日	委嘱研究員 教職員	27人	・研修の成果を発表する場を設け、広くその成果を公開する。 ・地区教育研究会メディア教育部会との共催での開催。	
	移動学習	天文教室	年間	幼保施設、 小中学校、 社会教育関係団 体等	3,465人 (146回)	・プラネタリウム投影を行い、天文教育と情操教育を行った。
		映画教室	年間		1,642人 (58回)	・視聴覚教材(16ミリフィルム、DVD等)の上映を行い、各種学習に役立てた。
プログラミング教室		年間	1,205人 (67回)		・主に学習指導要領に例示されている内容についてのプログラミング学習を行った。	
研修会	小中学校情報 教育研修会	5月9日	教職員	34人	・各校の情報教育、視聴覚教育担当者に対して研修会を行った。 著作権法第35条改正内容について 情報モラル教育の計画的な実施について 等	
	視聴覚教育 講演会 (オンライン開催・ アーカイブ配信)	7月5日	教職員	60人	・外部講師を招き教育の情報化に関する講演会を行った。 演題:「これからの授業づくりと校務の情報化 —教育DXに向けて今取り組むべきこと—」 講師:放送大学 准教授 小林 祐紀 氏	
	校務の情報化事業に基づく校務用アカウントの整備	年間	教職員	-	・北村山地区一体として学校教育の情報化を推進するため、地区内教職員に統一ドメインのアカウントを配付し、Microsoft Teams等を使用できる環境を整えた。	
映像制作・保存活動	北村山地区自作視聴覚 教材コンクール	審査会 11月20日 表彰式 12月13日	教職員、社会教育 関係者、一般	6作品	・学校教育、社会教育の分野における自作視聴覚教材の制作を奨励し、コンクールを開催し優れた作品に対して表彰を行った。	
	自作視聴覚教材の 制作	随時	教職員、社会教育 関係者、一般	1作品	・地域の伝承行事、伝統行事、記念行事等を映像資料として記録保存し、学習素材として提供した。 「村山市市制施行70周年記念式典」 ・全国自作視聴覚教材コンクールへの出品を行った。 入選 小学校部門「地域に伝わる祭り～湯野沢熊野大祭～」	
	自作視聴覚教材の アーカイブ化	随時	一般	-	・自作視聴覚教材のアーカイブ化を促進し、公式YouTubeチャンネルに作品をアップロードし、広く映像資料を提供した。 アップロード数 331本 チャンネル登録者数 837人 総視聴回数 206,975回	

事業名		期日	対象	参加人数	内容
一般公開	天文事業 会員制親子星空教室「スターウォッチングクラブ」	6月29, 30日 8月4日 9月13, 14日 10月18, 19日	小学生及びその保護者	親子27組	・学習会、プラネタリウム投影、観望会を行い、天文愛好者の育成と天文普及を図った。 ・8月4日には、鶴岡スペースステーションの佐藤涼子氏を講師に招き、オンラインで講演会を行った。 事業協力：北村山天文愛好会
	イベント センター開所50周年記念プラネタリウム	11月9日	一般	71人	・北村山視聴覚教育センターの開所50周年記念イベントとして、機材等の展示、プラネタリウムの特別投影、星空観望を行った。 事業協力：プラネタリウム・スペース・クラブ
	熟睡プラ寝たリウム	11月23日	一般	47人	・勤労感謝の日に合わせて、睡眠をテーマにしたプラネタリウム投影を行った。
	ミュージックプラネタリウム	3月1日	一般	中止	・音楽とプラネタリウムのコラボレーション企画を実施する。 ゲスト：シンガーソングライター 庄司 紗千 氏
土曜一般公開 (映画・プラネタリウム)	土曜開館に合わせて	一般	1,239人 (映画 553) (プラ 686)	・土曜開館に合わせて、一般公開（映画上映とプラネタリウム投影）を行った。	
施設利用等	土曜開館	設定日	教職員、一般	-	・地域住民を対象にセンター機能を解放した。（開館時間 8:30～12:30）
	研修会場の提供	随時	学校・社会教育関係者、一般	-	・学校教育、社会教育関係者に計画的、自主的な研修の場を提供した。
	教科書センター	年間	学校教育関係者、一般	-	・教科書センターとして、教科書の展示、保管を行った。 ・教科書展示会（6月14日～27日）を行った。
	オンライン配信 技術協力	随時	教職員	4回	・研修会等のオンライン配信に関する技術協力を行った。 5/29 北村山地区小・中学校長会協議会 ミドルリーダー研修会 7/31 楯岡小学校PTA研修会 11/11 東根市小中学校学力向上対策「担任力育成研修会」 1/27 村山市小学校深い学びにつながる授業づくり研修会
機材・教材利用	機器材、教材の購入、貸し出し	随時	学校・社会教育関係者、一般	-	・幼保施設、小中学校、社会教育団体等で利用する視聴覚機器材、教材を整備し、貸出を行った。
	機器材、教材等の利用記録	随時	学校・社会教育関係者	-	・機器材、教材等の利用状況をまとめ、整備計画の参考とした。
連絡提携	教育委員会等との連携	随時	各市町教育委員会	-	・管内各市町教育委員会及び村山教育事務所と連携し、円滑なセンター運営を図った。
	各協議会・団体との連携	随時	各協議会・団体	-	・各協議会および団体等と連携し、円滑なセンター運営を図った。 ①北村山地区指導主事連絡協議会 ②市町村教育委員会指導主事連絡協議会 ③全国公立視聴覚センター連絡協議会 ④全国視聴覚教育連盟 ⑤日本教育工学協会 ⑥山形県プラネタリウム連絡協議会 ⑦日本プラネタリウム協議会
	センター利用関係団体との連携	随時	センター利用関係団体	-	・センター利用関係団体にセンター機能を解放し、事業等で連携を図った。 ①北村山天文愛好会 ②プラネタリウム・スペース・クラブ ③紅花ビデオクラブ ④北村山マイコンクラブ
広報活動等	チラシによる広報	年間6回	管内幼保施設、小中高等学校、周辺文化施設、センター運営委員、広域議員、広域教育委員	-	・表面に「土曜開館のお知らせ」、裏面に「各種イベント等」を掲載したチラシを作成し、関係者および関係施設に配布した。
	メールマガジンやSNSによる広報	随時	希望者	-	・メールマガジンやSNSを効果的に活用し広く情報を発信した。
	ホームページでの情報発信	随時	一般	-	・ホームページを効果的に活用し広く情報を発信した。

## 自作視聴覚教材の制作

### 1 センター制作作品

教材（作品）名	種別	時間	県コンクール結果
村山市 市制施行70周年記念式典	映像教材	129分	
村山市の市制施行70周年を記念して行われた記念式典の様子を取めた映像教材。 「みんなで創った70年 つなげよう 次の世代へ」をテーマに、70年間のあゆみを振り返り、次の世代に願いを託す。式典のほか、記念公演と記念スライドショーの映像も収録した。			

### 2 自作視聴覚教材コンクール出品作品

#### 社会教育作品

種別	作品名	時間	制作者	コンクール結果	
				北村山地区 (※1)	山形県 (※2)
紙芝居	へったれあねこ	6分49秒 (枚数 14枚)	東根市商工会女性部	特選	入選
紙芝居	伝説「白蛇の滝」	6分14秒 (枚数 12枚)	文：青柳フヂ子 絵：齋藤美代三 英訳：エリック・ピーターソン	入選	優秀
紙芝居	山のけんか	6分10秒 (枚数 12枚)	東根市商工会女性部	入選	入選

#### 児童生徒作品

種別	作品名	時間	制作者	コンクール結果	
				北村山地区 (※1)	山形県 (※2)
映像教材	このもやっど あなたはどうか考える？	14分55秒	尾花沢市立尾花沢中学校 芸術部	特選	最優秀
紙芝居	オススメ！ 私のまちのパワースポット	5分38秒 (枚数 12枚)	山形県立東桜学館中学校 2年 奥山 杏菜	入選	優秀
ポスター	統合前に残したい！伝えたい！ 宮沢地区の宝 ～地域との関わりを通して～	21分47秒	尾花沢市立宮沢小学校 5・6年生	入選	最優秀
ポスター	「北山魅力発見し隊」 ～北山をPRしよう～	16分12秒	村山市立大久保小学校 4年生		優秀

(※1) 第44回北村山地区自作視聴覚教材コンクール 表彰式・発表会 令和6年12月13日

(※2) 第73回山形県自作視聴覚教材コンクール 表彰式・発表会 令和7年2月15日

(県への出品作品については、北村山地区のコンクール終了後に改編等を行った上で出品されている作品もあります。)

## センター利用状況

### 1 センター利用者数

令和7年3月31日現在

利 用 内 容			利用者数(人)
プラネタリウム観覧	移動学習	小・中学校	1,640
		社会教育・幼児	1,662
	センター事業		1,056
	管外・その他		163
	計		4,521
視聴覚室	移動学習	小・中学校	96
		社会教育・幼児	1,413
	センター事業		587
	管外・その他		133
	計		2,229
研修講座等	移動学習		1,205
	個人研修	学校教育	36
		社会教育	99
	センター研修講座		501
	計		1,841
学習室利用	学校教育		1,228
	社会教育		25
	その他		627
	計		1,880
合 計	学校教育		4,205
	社会教育		3,199
	センター事業		2,144
	その他		923
	計		10,471

※ 研修講座等の利用者数には、オンラインによる参加者数も含む。

2 教材・機器材貸出数

教材・機器名		利用数(件)	前年度同期(件)
教材	16ミリ映画	12	32
	DVD教材	1450	813
機器材	16ミリ映写機	0	1
	ビデオカメラ	92	56
	音響機器 (ワイヤレスアンプ等)	127	145
	プロジェクター	198	146
	スライド映写機	0	0
	マイク・スタンド	97	119
	スクリーン	111	82
	HDMI延長ケーブル等	131	103
	三脚	40	167
	トランシーバ	28	20
	デジタルカメラ	15	13
	展示パネル	420	118
	電工ドラム	77	72
	マイクケーブル	31	26
	レーザーポインター	22	18
	その他	18	8
合計		2,869	1,939

## 機器材、教材の購入、整備

### 1 視聴覚教材

教材分類	種類	数量
自作教材	DVD（センター公式YouTubeチャンネルで配信中）	6本

### 2 視聴覚機器材

項目	品目	数量
スリムサウンドバースピーカー	サンワサプライ製 MM-SPSBA3	1台

## 資料の収集

### 1 月刊誌及び年刊誌等の購入

#### (1) 教育関係誌

- ア 初等教育資料（月刊）
- イ 中等教育資料（月刊）
- ウ 視聴覚教育（月刊）
- エ 学習情報研究（隔月）
- オ 山形教育（年2冊）

#### (2) 天文関係誌

- ア 星ナビ（月刊）
- イ 星空年鑑（年1冊）

### 2 教育関係機関刊行物

(1) 管内小中学校……学校経営要覧、研究紀要、学校文集等

(2) 教育施設関係……要覧、紀要、研究実践等

(3) 小・中学校長会、及び教頭会関係

- ア 北村山地区小・中学校長会協議会「北村山の学校」
- イ 北村山地区小学校長会「北村山紀要」
- ウ 北村山地区中学校長会「北麗」
- エ 北村山地区小・中学校教頭会「北稜」

### 3 その他刊行物

## 広報、展示他

### 1 広報活動

#### (1) チラシによる広報

ア 一般公開用チラシ（土曜一般公開とイベント等に関する情報）の配布

#### (2) ホームページや公式 LINE、メールマガジン等による広報

ア 一般公開（観望会、イベントなど）の情報提供

イ 教育研究（委嘱研究、自作視聴覚教材コンクール等）に関する案内および成果の発信

ウ 教材・機材検索システムの運用

#### (3) マスメディアや各広報誌等に依頼しての広報

ア センター事業や一般公開に関するプレスリリース

イ 3市1町の広報紙への掲載依頼

#### (4) 公式 YouTube チャンネルの運用

ア 映像教材のアップロード

イ センター事業動画のアップロード

### 2 展 示

(1) 北村山子ども美術展特別賞作品

(2) 天文写真

### 3 刊行物

(1) 要覧

(2) プログラミング教育活用事例および ICT 活用事例集（平成25年度～令和5年度）

(3) 50周年記念誌



令和6年度  
視聴覚教育委嘱研究



## 【1 年次研究】

# より豊かな表現を目指すための ICT 活用

村山市立西郷小学校 杉原 祐美

### ＜研究の要旨＞

本研究では、音楽・音声言語などによる表現をより豊かにするための ICT 活用について考察した。児童が器楽・歌唱・音読などの練習をする際に、学習用コンピュータを使って、自身の姿を録画して視聴したり、お手本の動画を視聴したりすることによって、どのような効果があるかを検証した。その結果、児童は自身の姿からよさや課題を見つけたり、よりよい表現をするためのポイントに気付いたりすることができた。ICT を活用することが、より豊かな表現を目指すのに有効であることが明らかになった。

キーワード：ロイロノート・スクール、スプレッドシート、豊かな表現、ICT 活用

## 1 研究テーマ

本学級の児童は、男子 4 名・女子 9 名の合計 13 名の 3 年生で、何事にもまじめに取り組み、自分なりの考えをもって学習に取り組むことができる。一方、全体的に受動的でおとなしく、自分から発言することや、思い切って自由にやってみることに苦手意識をもつ傾向がある。3 年生に進級した当初は、ささやくような声で歌ったり、発言しても声が学級全体に届かなかつたりすることが頻繁にあった。

このような児童が、相手意識をもって話したり、のびのびと表現したりすることができるようになってほしいと願い、ICT を活用することでその願いが達成できると考えた。

以上のことから、研究テーマを「より豊かな表現を目指すための ICT 活用」と設定し、音楽科や国語科を中心として実践することとした。

## 2 研究の視点

- (1) 課題や変容を見つけるための ICT 活用
- (2) 自分の課題を解決するために必要な情報を選択して活用する力を育成するための手立て

## 3 研究の方法と計画

- (1) 視点 1 について

音楽表現や音声言語表現・身体表現などは、リ

アルタイムで自分を客観視することが難しい。しかし、学習用コンピュータを使うことによって、児童は自身の話す姿・表現する姿を録画し、何度でも視聴することができる。児童が自身の姿を客観的に見ることで、自分の思いや意図にあった表現ができているかを確認したり、課題を見出したることができるようにしたいと考えた。また、記録をポートフォリオとして活用し、自身の成長や変容を感じることができるようにすることを目指した。

### (2) 視点 2 について

児童が必要としている情報は、習熟度や課題などによって一人一人異なる。しかし、児童の実態から、自分で欲する情報について、検索して適切な情報を集めるのは難しいと判断した。そこで、自分に必要な資料（教科書の QR コードのコンテンツ、範読、範奏、伴奏、演奏動画など）を、児童が必要とするタイミングで、自分で選んで活用することができるようにしたいと考えた。また、ロイロノート・スクール<sup>1)</sup>を使用して、再生速度を変えて視聴したり、気になるところを何度も繰り返し確かめたりしながら、児童が粘り強く主体的に課題解決に取り組めるようになることを目指した。

## 4 授業実践の実際

## (1) 実践1

### ア 実践の概要 (9月実践)

#### (ア) 単元名

第3学年 音楽科

「拍にのってリズムをかんじとろう」

#### (イ) 単元の目標

拍にのって演奏したり、まとまりのあるリズムをつくりたりすることができる。

#### イ ICTの活用について

パートごとのお手本動画を作成し、ロイロノート資料箱で共有した。児童が必要としたときに、再生速度を変えたり、気になるところを繰り返し確認したりしながら視聴できるようにした。



図1. 鍵盤ハーモニカのお手本動画

児童が演奏の練習をする際に、演奏する姿を友達と動画で撮り合い、自身の演奏を客観的に確認した。



図2. 演奏の様子を録画する児童

#### ウ 子供の学びの姿

楽譜を見たり音を聴いたりするだけでは演奏することが難しい児童にとって、お手本動画は上達するための助けとなった。担当するパートの動画を視聴しながら練習することで、演奏することができるようになった児童がいた。

友達に撮ってもらった自身の演奏を確認することで、「途中からテンポが遅くなっている」等の気付きがあり、その後の演奏に生かそうとする姿が見られた。



図3. お手本動画を視聴する児童

## (2) 実践2

### ア 実践の概要 (12月実施)

#### (ア) 単元名

第3学年 音楽科

「せんりつのとくちょうをかんじとろう」

#### (イ) 本時の目標

曲の山を感じながら、盛り上がりが伝わるように歌うことができる。

#### イ ICTの活用について

教科書のQRコードのコンテンツを活用し、曲の旋律を何度も聞いて確かめた。また、児童が歌う様子を友達と動画で撮り合い、自身の姿を視聴して客観的に確認した。視聴して感じたことをカードに書いた。この実践の時には、児童はただ自分の姿を見るだけではなく、ポイントをしばって客観視することができた。

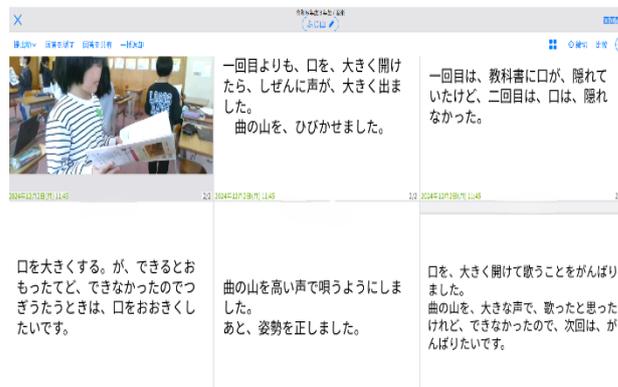


図4. 児童が提出したカード

#### ウ 子供の学びの姿

自身が歌う姿を視聴することで、児童にはさまざまな気付きがあった。「口を大きく開ける

ことができていると思っていたけれど、できていなかった。」「曲の山を大きく歌ったと思ったけれど、あまりできていなかった。」等、ICTを活用したからこそ得られた具体的な気づきが挙がった。思い描いていた「自身の歌う姿」とのちがいに気付くことができた。

### (3) 実践3

#### ア 実践の概要 (12月実践)

(ア) 単元名

第3学年 国語科 「三年とうげ」

(イ) 本時の目標

自分が選んだおもしろい民話を、動画で紹介しよう。

イ ICTの活用について

「三年とうげ」の学習と並行して、児童は民話の本を毎日一冊ずつ図書館で借りて読み、その本の題名・おもしろかったところ・おもしろさ(4段階で評価)をスプレッドシート<sup>2)</sup>に記録して共有した。そして、読んだ民話の中でいちばんおもしろかったものを紹介する動画を児童が各自で撮影し、お互いに視聴した。

	1と2日		3と4日	
	お話の名前	おもしろかったところ	おもしろさ	お話の名前
2	さんいんのさつね	三葉のねむり方や、文の読み	3	たいいんたいいんたいいんだー
3	まのくじ			ブレーメンのおんがくたい
4	やまんばのしほ	三葉のねむり方や、文の読み	3	ななせがらい
5	おしとりさよふしん	三葉のねむり方や、文の読み	2	むらしべちまじゅ
6	なすあいのすむち	三葉のねむり方や、文の読み	4	うらかたやまんば
7	まめのくじ	三葉のねむり方や、文の読み	3	さんいんのさつね
8	ゆきひめ	この題	4	鬼とけりまめ
9	おしよことそう	三葉のねむり方や、文の読み	3	かみさざりね
10	ひんぼうがめとぶくのかみ			ゆきひめ
11	ひんぼうがめとぶくのかみ			三葉のねむり方や、文の

図5. 児童が入力したスプレッドシート

#### ウ 子供の学びの姿

ローマ字入力が上達し、スプレッドシートの使い方にも少しずつ慣れてきた。スプレッドシートで共有したことにより、誰がどの民話を読んだかを見ても教師も把握することができた。動画を撮影して、自分の話す言葉や話す姿を視聴し、繰り返し話す練習をしたり、言葉を付け足して話したりして、よりよく紹介しようと何度も撮り直す児童の姿も見られた。



図6. 民話を紹介する児童の動画

### (4) 実践4

#### ア 実践の概要 (9月実施)

(ア) 単元名

第3学年 体育科

「表現運動 リズムダンス」

(イ) 単元の目標

軽快なロックなどのリズムに乗って全身で弾んで踊ったり、友達と自由にかかわり合ったりして楽しく踊ることができる。

イ ICTの活用について

単元のはじめに、文部科学省が配信している動画を使用して、音楽に乗って自由に踊る子どもたちの姿を視聴した。

児童が踊る様子を友達と動画で撮り合って視聴し、自身や友達の姿を客観的に確認した。気付いたことをロイロノート上で記録した。

#### ウ 子供の学びの姿

自身が踊る姿を客観的に視聴することで、「恥ずかしがらずに踊りたい。」「ジャンプだけではなく、いろいろな動きをしたい。」「体の動きを前より大きくできた。」等、課題や変容を見つけることができた。



図7. 踊る様子を撮影した動画

### (5) 実践5

#### ア 実践の概要 (11月実践)

(ア) 単元名

### 第3学年 国語科

「すがたをかえる大豆」

#### (イ) 本時(家庭学習)の目標

自分の読み方を確認し、音読をよりよくすることができる。

#### イ ICTの活用について

家庭学習で音読をする際に、児童が自身の音読する様子を録画して視聴した。自分の音読を五つの視点(正しく・はっきり・すらすら・口の開け方・読む速さ)で自己評価し、気付いたこととともにスプレッドシートに記録した。1週間に2回(月曜日と金曜日)実施した。



図8. 音読する児童の動画

#### ウ 子供の学びの姿

音読する様子を客観的に視聴することで、自分の読み方のよいところや課題を見つけることができた。「読む速さが少し速すぎた。」「はきはき読めるようにしたい。」「もう少し口を大きく開けたい。」「前よりすらすら読めるようになった。」等の気付きがあり、漫然と取り組んでいた音読練習への目的意識が高まった。

	11/25日(月)	11/29日(金)	11/30日(土)							
0	3	3	4	2	2					
1	2	2	2	2	3					
2	2	2	2	2	3					
3	2	3	1	2	3					
4	2	2	3	2	3					
5	1	1	1	1	1					
6	1	1	1	1	1					

図9. 児童が記録したスプレッドシート

#### (6) 実践6

##### ア 実践の概要(7月~実践)

#### (ア) 単元名

第3学年 裁量 「ローマ字入力の実践」

#### (イ) 単元の目標

キーボードを使ってローマ字入力を行うことができる。

#### イ ICTの活用について

国語のローマ字の学習と並行して、「キーボー島アドベンチャー」<sup>3)</sup>を使用したローマ字入力の練習を始めた。主に始業前の時間や裁量の時間に5~15分程度実施した。

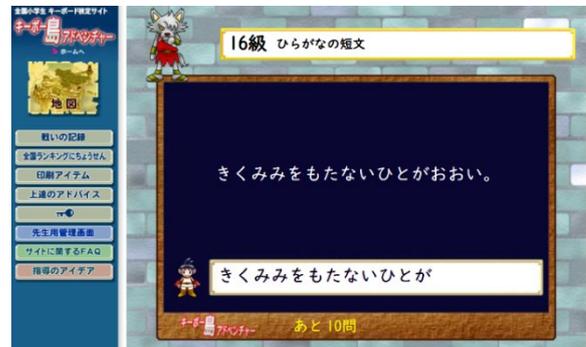


図10. キーボー島アドベンチャーの画面

#### ウ 子供の学びの姿

「キーボー島アドベンチャー」には、入力するキーが表示される「自主トレ」と、表示されない「練習試合」「試合」があり、児童は自分の状態に合わせて選択して取り組んだ。級が上がることで自分の伸びを実感したり、友達と競ったりしながら、ゲーム感覚で楽しくローマ字入力の練習に励むことができた。ローマ字入力が上達したため、ロイロノートやスプレッドシートへの入力に要する時間が短くなった。

## 5 到達点と今後の課題

### (1) 視点1について

録画した自身の姿を視聴することに、はじめのうちは恥ずかしさから抵抗を感じる児童もいた。しかし、さまざまな場面で繰り返すうちに慣れ、真剣に視聴するようになっていった。

児童へのアンケートを実施したところ、「演奏や音読やダンスを撮って、自分の姿を動画で見ることは、演奏や音読やダンスが上手になるための役に立ちましたか。」という問いに対し、約90%が「とても役に立った」「少し役に立った」と回答した。また、その理由については、「頑張りたいことや直したいことを見つけられたから」が最多(複数回答可)で、「何度も見て確認できたから」が次

に多かった。

⑥ロイノートを使って、動画をとったことにつ...やダンスが上手になるための役に立ちましたか。  
12件の回答

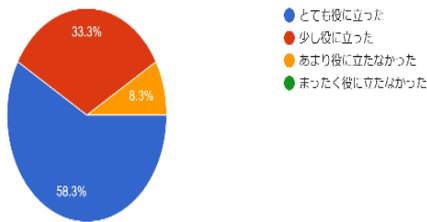


図 11. 「自分の姿を動画で見ると役に立ちましたか。」の結果

☆⑥で「とても役に立った」「少し役に立った」...すか、あてはまるものを全部をえらんでください。  
11件の回答

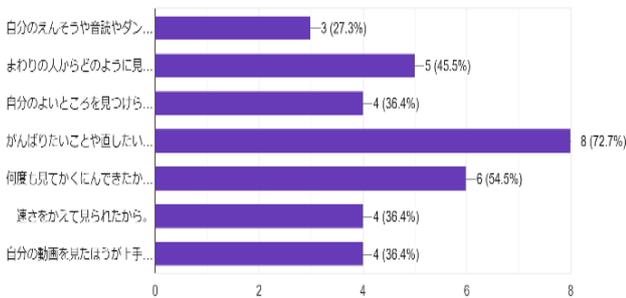


図 12. 役に立った理由

器楽・歌唱・音読・ダンスなどの表現をしたときに、思い描く自身の姿と実際の姿との間には差があることに気付き、誰かに指摘されることなく自分で自分の課題を見つけることができるようになった。この点はひとつの成果だと考える。見つけたことについて、これから何をしていくのか、どうしたら改善できるのか。児童が具体案を出すことができるようにしていくことが、今後の課題として挙げられる。気付きを次のステップにつなげるために、児童が自ら「〇〇をするともっとよくなる。」と言語化できるようにしたい。そのためには、指導者が今まで以上に言葉を提示したり視点を与えたりしながら、各教科での言語活動を充実させていくことが必要だと考える。

## (2) 視点 2 について

前出のアンケートの「先生のお手本の演奏や、友達の動画を見たことは、役に立ちましたか。」という問いに対し、全員が「とても役に立った」「少し役に立った」と回答した。その理由については、「上手になるためのポイントがわかったから」が

最多で、「何度も繰り返して見られたから」「動画を見たおかげで自分もできるようになったから」が続いた。

⑥ロイノートを使って、先生のお手本のえんそ...、友達の動画を見たことは、役に立ちましたか。  
12件の回答

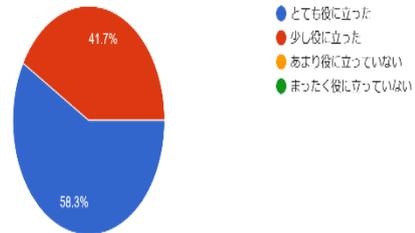


図 13. 「お手本などの動画は役に立ちましたか。」の結果

☆⑥で「とても役に立った」「少し役に立った」...すか、あてはまるものを全部をえらんでください。  
12件の回答

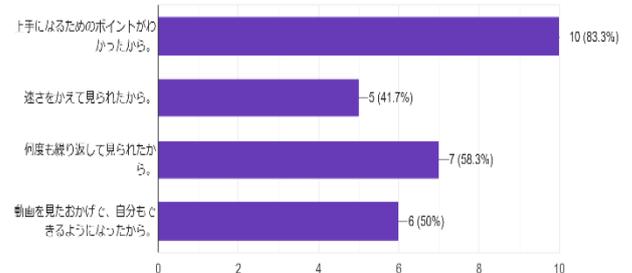


図 14. 役に立った理由

実践 1 のように、器楽を苦手とする児童が、お手本動画を活用して自分のパートを演奏することができるようになった例は、成果であると考えられる。一方、目的意識をもたずになんとなく視聴したり、視聴という行動そのものに満足したりする児童も多く見られた。ICT を使うことのよさや意義を、児童に十分に感じさせることができているのではないかと推察する。児童と指導者が視点や課題意識を明確にもち、課題解決のためのツールとして ICT を活用できるようにしていくことが求められると考える。

## (3) ローマ字入力

ICT を活用して、自分の思いや考えを言語化して表現するために、ローマ字入力のスキルは不可欠である。前出の「キーボー島アドベンチャー」について、アンケートでは全員が「役に立った」「少し役に立った」と回答し、4 年生になっても取り組みたいとの意思をもっている。より短時間

で正確に入力することができるよう、今後も練習を重ねていくことが必要だと考える。

## 6 参考文献

瀧川淳 (2022) 「1人1台端末でみんなつながる！音楽授業のICT活用ハンドブック」, 明治図書出版社.

### 注

- 1) ロイロノート・スクールは, LoiLo 社が開発したクラウド型の授業支援アプリである。直感的な操作で, 文字だけではなく動画や写真などでも記録に残すことができる。回答や資料を共有することも可能。
- 2) スプレッドシートは, Google 社が提供している表計算ソフトである。シートを共有して同時編集をすることができる。
- 3) キーボー島アドベンチャーは, スズキ教育ソフトが開発した小学生向けの日本語キーボード検定サイトである。30 級からスタートし, キャラクターとの試合に勝つと級が上がり, 難易度が徐々に高くなる仕組みになっている。

## 【1 年次研究】

### 特別支援教育（情緒学級）における学びの個別最適化をはかるための ICT 活用

東根市立長瀬小学校 柏倉雄太

#### < 研究の要旨 >

本研究では、特別支援学級（情緒学級）での個別最適化を図るための ICT 活用について、研究及び考察をしてきた。PowerPoint や Excel, Word, 等を用いることで、児童と教師が学習課題や学習過程、振り返りなどの情報を共有し、学習への意欲や知識・技能、思考・判断・表現の力が、どのように身に付くのか検証した。

その結果、児童は、紙面上で学習するよりも学習への意欲を示すことが明らかになった。特に、国語科の学習では、長い文章も教師との共同編集によって、構成を考えながら入力することができるようになった。

キーワード：特別支援教育 情緒学級 学びの個別最適化 ICT 活用

#### 1 研究テーマ

筆者は現在、特別支援学級（情緒学級）の担任をしている。本学級の児童は A 児 1 名である。A 児は国語科及び算数科以外の教科等については、交流学級で学習している。これまでの A 児の学習の様子については以下のとおりである。

##### 【読むことについて】

- ・文章を流暢に音読することができる。
- ・読んだ内容について、質問に答えることができる。

##### 【書くことについて】

- ・時系列で事実を表したり、自分の気持ちを簡単な言葉で表現したりすることができる。
- ・長い文章を書くときは、担任と共同編集を行い支援することで、思いを言葉で表現することができる。

##### 【その他】

- ・総合的な学習の時間に、PowerPoint<sup>1)</sup>で納豆について調べたことをまとめて資料を作成したり、Microsoft Word<sup>2)</sup>（以下、Word）で文章を作成したりする経験を積んできた。

一方で、A 児とともに学習を進めていくなかで、次のような困難さがあることもうかがえた。

##### 【読むことについて】

- ・話の中心に気を付けて読み、要点をまとめること。
- ・登場人物や筆者の気持ちや考えに気付いて表

現すること。

##### 【書くことについて】

- ・自分の思いや考えについて、自分で文章の構成を考えながら表現すること。

このような A 児の実態から、筆者は、A 児が授業内容への興味・関心を高め、A 児自らの言葉で、思いや考えについて表現することができる姿を目指したいと考えた。

文部科学省（2021）は答申のなかで、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を目指していくこととし、その実現のためには、ICT は必要不可欠であると示している。また、文部科学省（2020）は、特別支援教育における ICT 活用の必要性について次のように述べている。

障害の状態や特性やそれに伴う学びにくさは多様かつ個人差が大きく、障害のない児童生徒以上に「個別最適な学び」⇔「特別な支援」が必要である。

このことから、個別最適な学びと ICT 活用の親和性が高いことがうかがえる。

特別支援学級等における ICT を活用した授業実践も報告されており、多くの示唆が得られている。

松野泰一（2021）は、ICT を効果的に活用することで、障害の状態や特性、心身の発達の段階等に応じた ICT 機器を用いることによって、学習上

や生活上の困難さを補い、指導の効果を高めることができる」と主張している。岡野由美子（2019）は、特別支援教育における ICT の活用について、次のように主張している。

特別支援学校や特別支援学級において、障害特性に応じて個別に適宜活用することは、コミュニケーション面においても大きな支援ツールとなり、教員や保護者から言葉をかけられて育ってきた児童生徒が、自らの思いを伝達するための手段を獲得し、表現することができたとき、さらなる言葉の獲得や学習意欲の向上など、様々な効果をもたらす事となる。

このように、自分の考えや思いを表現することに困難さをもった児童にとっても、ICT 活用の効果が期待できる。

以上のことを踏まえ、A 児について考えると、ICT 活用は、学習上の困難さのみならず、コミュニケーションといった人との関わりについても困難さが軽減でき、より良い生活を送ることができるようになる」と考える。

以上のことから、本研究では、情緒学級において、ICT を活用した授業実践を行い、A 児の個別最適な学びを目指すとともに、A 児の学習上の困難さの軽減を目指すための ICT の活用のあり方について明らかにする。

## 2 研究の視点

本研究で取り上げる ICT 活用について、PowerPoint や Word 等のソフトウェアを用いた、A 児と担任による共同編集機能、単元計画や目標、授業内容や振り返りの共有及びデジター教科書の活用が中心となる。上記の機能を複数の教科や単元での活用を通して、各教科の資質・能力の向上を図る。そこで、以下の視点で研究を進めてきた。

- (1) 正しく読んだり書いたりする力を高めるための工夫
- (2) 学習に必要な情報を正しく収集する力を高めるための工夫

## 3 研究の方法と計画

### (1) 視点1について

#### ①「読むこと」について

文章が読み上げられ、学習場を提示することができるデジター教科書<sup>3)</sup>を用いることで、児童が抵抗なく音読に取り組むことができるようにする。内容の理解が正しくできているかを確認しながら、学習を進めるようにする。家庭学習でも音読に取り組んだり、正しい発音で読むことに挑戦したりできるように、Microsoft Teams<sup>4)</sup>（以下、Teams）上に課題を提示する。

#### ②「書くこと」について

ローマ字入力や音声入力、共同編集の機能を活用して進める。A児がローマ字入や音声入力で入力したものを担任と共同編集することで、A児の思いを生かしながら、書くことができるようにする。また、入力画面を提示することで文章構成や言葉遣い、誤字脱字にも留意しながら書くことができるようにする。さらには、書いた文章を読んで録音し、繰り返し聞きながら自分が作成した文章を推敲することができるようにする。

### (2) 視点2について

担任がインターネットや教科書、そのほかの資料から、情報を精選して提示する。情報を焦点化することで、児童が必要な情報を得やすくなるようにする。他教科とのつながりも意識した上で、自分に必要な情報を集め、比較したり分類したりすることを通して、正しい情報を得ることができるようにする。

## 4 授業実践の実際

### (1) 実践1

#### ア 実践の概要（11月実践）

- |   |
|---|
| (ア) 単元名 第4学年 国語科<br>「未来につなぐ工芸品」<br>「工芸品のみりよくを伝えよう」  |
| (イ) 本時の目標<br>自分が興味をもった工芸品を選び、<br>資料を用いて調べ、得た情報をまとめ、 |



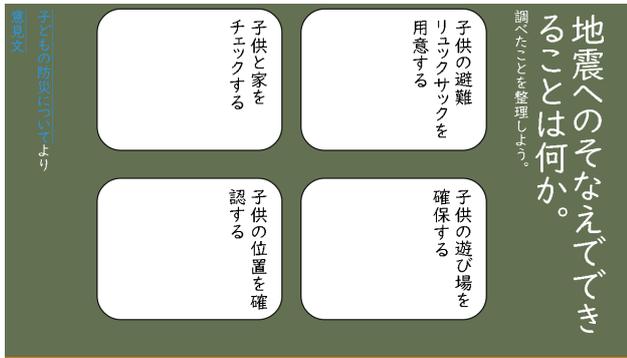


図 3. 情報共有のためのスライド

### ウ 児童の学びの姿

紙面上で学習するよりも明らかに書くのが速くなった。これまで、「書くこと」の単元の学習では、上記のような文章を書くまでに、紙面上だと2から3単位時間ほどの時間を要していたが、Wordでの編集を取り入れたことで、1から2単位時間ほどで書くことができるようになった。A児と担任が共同編集し、A児の進捗状況を確認しながら、支援することができ、A児が困り感を感じたときに担任に援助を求めやすい環境を作ることができたことが要因であると考えられる。また、得たい情報はPowerPointにまとめられているため、A児が必要に応じて情報を確認する様子も見られた。

## 5 到達点と今後の課題

本研究の到達点は、次の3点である。

### (1) 視点1について

#### ① 「読むこと」について

デジ教科書を用い、学習場면을提示し、範読を聞くことによって、視覚と聴覚で情報を得ることができるようになったため、学習場面を正しくとらえることの一助となったと考える。また、音声によるガイドがあることで、テキストに集中しやすくなり、A児が音読する際も、漢字の読みや、語のまとまりに気を付けて読むことができるようになったと考える。

#### ② 「書くこと」について

A児がローマ字入力や音声入力で入力したものを教師と共同編集することで、A児は自分の考えに自信がもてるようになり、自分の思いを生かしながら、書くことができた。また、入力画面を提示することで、A児は自分の文章を視覚的に確認できるようになり、文章構成や言葉遣い、誤字脱字にも留意しながら書くことができるようになった。自分で漢字を選択しながら変換することで、A児は漢字の使い方や意味を学び、適切に使うことができたと考えられる。



図 4. 共同編集によって作成した意見文

## (2) 視点2について

教師がインターネットや教科書、そのほかの資料から、情報を精選して提示し、情報を焦点化することで、A児が必要な情報を得ることができるようになったと考える。多様な情報が膨大にある状況でA児に取捨選択してもらうことは、A児の実態を踏まえると難しいことであると判断した。そこで、はじめに教師が学習する内容にかかわる情報を限定し、そのなかからA児が学習課題を解決するための情報を選択できるようにした。

はじめは教師が情報を制限している状態である。しかし、その中からA児が必要感に応じて情報を自ら選択し、解決できたという成功体験は、A児にとって情報活用能力を育成するためのスモールステップとなり得たと考える。このような取組をさらに重ねていったり、教師の情報を制限する量を緩めていったりすることによって、A児の情報活用能力を高めていくことが期待できる。

本研究の課題点は、次の2点である。

### (1) 視点1について

A児の言葉を担任が対話の中で代弁して表現したり、補ったりすることで学習を進めてきた部分があった。そこで、A児自身が自分の言葉を分かりやすく表現し、必要な手段を選びながら学習を進めることができるようになることも念頭に置き、考えを整理することができるようにICTを活用することである。

### (2) 視点2について

A児が学習に必要な情報を自分で選び、取捨選択して活用することができるように、要点をとらえて扱うことができる力を身に付けることである。そのためには、情報の内容について、「どんなことが書いてある?」「この資料からどんなことがわかった?」といったように、資料の内容について、A児に問いかけながら、教師と一緒に確認していく。このことによって、教師の援助が少なくなってもA児が自ら情報の中身について把握していくことができるような力を身に付けられる

のではないかと期待している。

## 6 引用・参考文献

- 松野泰一(2021)「1人1台端末:GIGAスクール構想」,金子一彦(編)最新の教育改革2021-2022, pp.26-29,教育開発研究所.
- 文部科学省(2020)「特別支援教育の充実について」[[https://www.mext.go.jp/content/20211009-mxt\\_tokubetu02-000018244\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211009-mxt_tokubetu02-000018244_02.pdf)] (最終閲覧日:2025年2月4日)
- 文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す,個別最適な学びと,協働的な学びの実現～(答申)」, [[https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt\\_kyoiku01-00014639\\_10.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt_kyoiku01-00014639_10.pdf)], (最終閲覧日:2025年2月4日)
- 岡野由美子(2019)「特別支援教育におけるICT活用に関する一考察—障害のある児童生徒の支援ツールとしてのICT—」,人間教育第2巻第5号.

## 注

- 1) PowerPointは、Microsoftが開発したプレゼンテーションソフトウェアで、文字や写真などが入ったスライドを簡単に作成できる。本研究では、児童教師間で学習内容を共有したり、共同編集したりする際に用いている。
- 2) Microsoft Wordは、Microsoftが開発した文章作成ソフトウェアで、長い文章でも簡単に入力できるほか、文字の大きさやフォントを変えたり、写真を挿入したりできる。本研究では、振り返りシートを共有したり、共同編集で文章を作成したりする際に使用している。
- 3) デイジー教科書は、「通常の教科書と同様のテキスト、画像を使用し、テキストに音声をシンクロ(同期)させて読むことができるもの(日本障害者リハビリテーション協会より抜粋)」である。本研究では、教材文の範読の際に用いている。
- 4) Microsoft TeamsはOffice365にあるチャット

ベースのワークスペース。チームを作り、簡単にファイルを共有し、PowerPoint, Word, Excelなどのアプリで情報を共有することができる。

## 【1 年次研究】

### 三つの「コ」の資質・能力を育成するために効果的な ICT 活用

～「セルフコントロール力」「コミュニケーション力」「コラボレーション力」の育成～

尾花沢市立尾花沢小学校 青柳道彦

#### ＜研究の要旨＞

尾花沢小学校では、児童の三つの「コ」の資質・能力の育成を図る教育活動を実践している。本実践では、授業において①「児童に学び方を選択させるルーブリックを基にした自由進捗学習」②「家庭学習と日々の授業の連動させた学習」を実施し、その中で ICT を効果的に活用することで、児童の三つの「コ」の資質・能力や学力を確実に向上させられる手法を研究した。

キーワード：ICT 活用 セルフコントロール力 コミュニケーション力 コラボレーション力

#### 1 研究テーマ

学年始の NRT の結果や日々の学習の様子では、学習に受動的な児童が多く見られる。前学年における学習内容が十分に理解できていない児童も少なくない。この学習の定着状況に至る一番の原因は、児童の姿から三つの「コ」の資質・能力の不足であると考えられる。学習の場面では、課題を設定し自分で学習を進めること（セルフコントロール力）や交流の場面で友達と考えを発表し合うこと（コミュニケーション力）に抵抗を感じ、話合いや学習が停滞し答えやまとめを一人一人が見出せない（コラボレーション力不足）場に多く出合ってきた。そのような場面での児童の解決方法は、話合いではなく、それまでの自分の考えを放棄して、特定の児童の発言や教師の指導を待ち、それらを全て書き写すことであった。

本学級の児童は、友達と話をすること自体には抵抗はないと話している。しかし、授業となると過半数の児童が自分の考えに自信がなく、友達の考えを知るには自分も考えを話さなければならないと思っていることで、話合いによる学習が成立しない様子が多く見られる。特に国語科、算数科、社会科、外国語科の話合いの時間には、学習に対する意欲の低下が見られる。これらの課題を解決するため、Microsoft Word<sup>1)</sup>（以下、Word）、Microsoft Excel<sup>2)</sup>（以下、

Excel）、Microsoft OneNote<sup>3)</sup>（以下、OneNote）での共同編集を用いて、いつでも他者参照できることや一人一人が課題解決に向かって自分の学習方法を選択、決定して学ぶ環境を整えることが三つの「コ」の資質・能力の育成に必要な不可欠であると考えた。

#### 2 研究の視点

- (1) 自分で考え、友達と交流しながら学習を進めるセルフコントロール力、コミュニケーション力を高めるための工夫
- (2) 友達の考えを取り入れて自分やグループの考えをアップデートするコラボレーション力を高めるための工夫

#### 3 研究の方法と計画

##### (1) 視点1について

クラウド上でファイルを共有することで、不安なく他者参照することができる。自力解決の場面において、自分の考えをもつことが難しい児童にとって、効果的と考える。学習を進めることができる児童も友達の新しい視点をもって、自分で学びを高められるように活用する。

##### (2) 視点2について

共同編集を生かして、友達とともに考え、答えやまとめをアップデートしていく活動を取り入れていく。まとめの共有の時間では出し合った答

え、まとめについてグループごとに他グループのまとめと比較し、共通点や相違点に気付いたり、気付いたことをもとにまたアップデートしたりするといった力の育成を図る。

#### 4 授業実践の実際

##### (1) 実践1

###### ア 実践の概要

- (ア) 単元名 第5学年 社会科  
「くらしを支える工業生産」
- (イ) 単元(または本時)の目標  
必要な情報を集め、読み取り、日本の工業地域や工業地帯の分布の特色などについて理解する。

###### イ ICTの活用について

###### ①Microsoft Teams<sup>4)</sup>

児童同士の共同編集や教師による児童の学びの状況把握に活用する。

###### ②Microsoft Forms<sup>5)</sup>

児童の授業ごとの振り返りや教師による児童の学びの状況把握に活用する。

###### ③NHK for School

調べ学習の際に児童が活用する。

###### ウ 児童の学びの姿

Teams のクラスノートブックにて、グループごとに共同編集をしながら、自分で学びを進める時間と友達と交流し学びを深める時間の2段階に分けた授業を展開した。児童は学びの地図(図1)をもとに、グループで話し合いながら課題を立て、学習を進めていった。

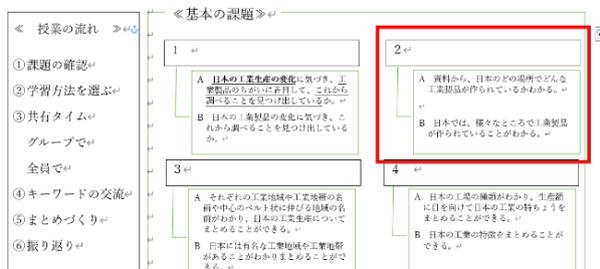


図1. 授業の流れと学習計画

その後、自分で調べる媒体を教科書、資料集、蔵書、NHK for School から選んで学びを進めていった(図2)。自由選択にしたため、グループの中でそれぞれ四つの媒体の担当を決め、全

の媒体で学習しようとするグループや苦手意識がある児童は二人一組になって教科書で学習を進める分、図書の本はほかのグループから教えてもらって学習しようとするグループなど自分たちで学び方を工夫する様子が見られた。



図2. 社会科ワークシート (OneNote)

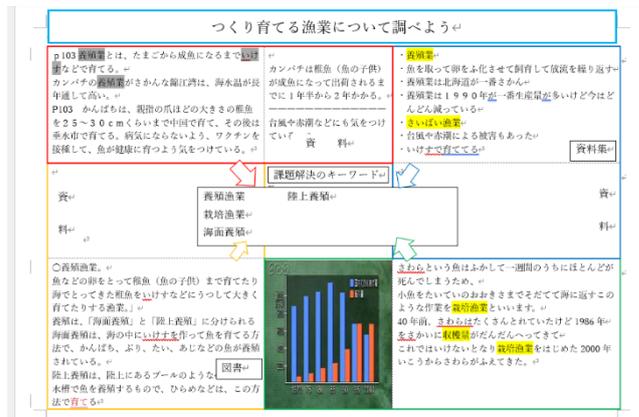


図3. 社会科ワークシート (Word)

クラスノートブックでの共同編集を行うことでいつでも見たいときにグループ内、グループ外の児童同士で学び合うことができていた。単元を通して、少しずつ文章だけでなく調べた画像を参照して説明したり、教科書や資料集、蔵書の資料を写真で撮って共有したりしながら、課題解決に向かう姿が見られた。

児童へのアンケートからは、以下のような結果が得られた。従来の授業と比べて、コラボレーションシートを用いた自由進度学習では、セルフコントロール力、コミュニケーション力、コラボレーション力の全ての項目で役に立っ

たと答えた児童が 90%を超えた。

3. 共同編集は自分で学習を進めることに役に立ったか。(セルフコントロール)

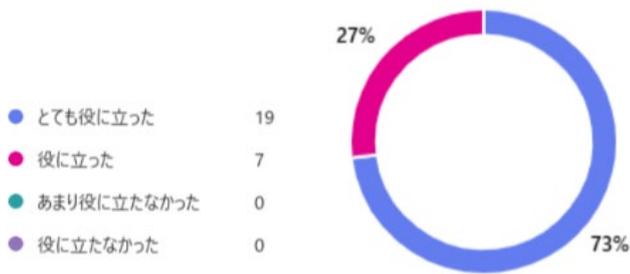


図 4. Forms アンケート結果 1

4. どのように役に立ちましたか？全て選びましょう。 ※役に立たないと感じた人はその他に理由を書きましょう。

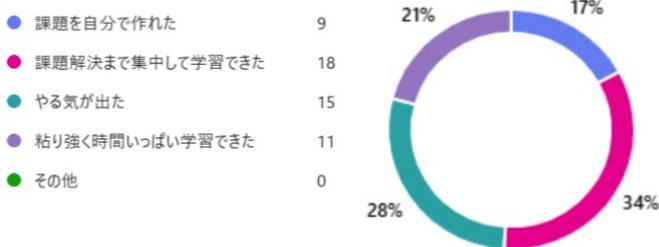


図 5. Forms アンケート結果 2

5. 共同編集があることで友達と交流したり、友達の意見をもらったりすることがこれまでよりできるようになりましたか？(コミュニケーション力)

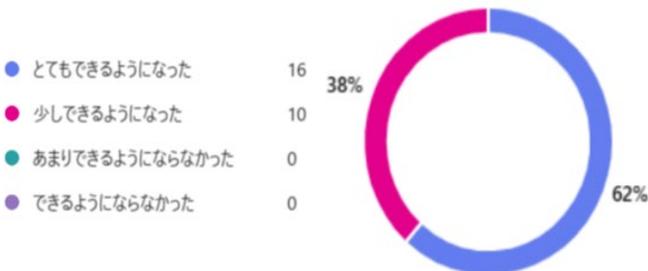


図 6. Forms アンケート結果 3

6. 共同編集を使うことは、友達の意見を自分の考えに取り入れてよりよい考えを作るのに役に立ちましたか？(コラボレーション力)



図 7. Forms アンケート結果 4

(2) 実践 2

ア 実践の概要

(ア) 単元名 第 5 学年 算数科

「正多角形と円」

(イ) 正多角形の意味や性質、及び円周率の意味や円周の長さの求め方を理解し、正多角形を作図したり、円周率を用いて円周の長さを求めたりしている。

イ ICT の活用について

①Teams

児童同士の共同編集や教師による児童の学びの状況把握に活用する。さらに、作図や実測の仕方について動画撮影と共有に活用する。

②Excel

関数を用いた表計算において活用する。

③GeoGebra<sup>6)</sup>

図形の作成や操作などの機能を用いて円と正多角形の間接関係を視覚的に捉えやすくするために活用する。

④Scratch<sup>7)</sup>

正多角形の作図に活用する。

ウ 児童の学びの姿

単元の導入で六角返し作りという活動を実施した。デジタル教科書の動画を活用し、セルフコントロールできるように自由進度で学習した。予想通り一度の動画視聴で作成できた児童は少なく、繰り返し見る児童が多かった。

正多角形の作図では、プログラミング教材の Scratch を活用することで、鉛筆での作図と違い、直線を引くことも削除することもボタン一つでできるため、何度も繰り返し挑戦する姿が見られた。

円周率の学習では、家庭学習で実測活動を取り入れることで、一人ひとりがそれぞれ考えながら実測することができた。Teams で測定した数値や考えなどについても共有できるため、友達同士で見合いながら学習していた児童もいた。測定方法がわからなくなったときのために、自作の動画を撮影し、Teams で共有することで児童によっては繰り返し視聴し、何度も数値を確かめていた。コラボレ

ーションシートを活用することで、一人ひとりの実測した数値をもとに考える活動を実施できた。

直径と円周にはどんな関係が成り立っているのだろうか？			
調べたもの	直径	円周	何倍
セロテープ	9.8	30	3.06
水筒	6	18.5	3.08
コースター	10.2	31.7	3.11
綿棒の箱	6.6	20.5	3.11
4			12.36

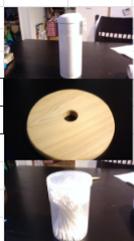


図 8. 家庭学習で活用した円周率シート

円周と直径にはどんな関係があるのだろうか																			
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
17.00																			
54.80																			
コラボレーション										平均									
3.22																			

図 9. 授業で活用したコラボレーションシート

## 5 到達点と今後の課題

### (1) 視点1について

算数科、社会科のいずれにおいても、児童たちの学びの様子から、共同編集を用いた学習は、セルフコントロールしながら課題について自分なりにまとめたり、解決のために他者参照したり、コミュニケーションをとったりすることに効果的であることがわかった。算数科では家庭学習でも、友達の考えを見たり、計測結果を見ながら学習できたりしたことで安心して学習を進めることができていた。社会科では、ループリックに基づいた自由進度学習を同時に取り入れることによって「自分の調べたいことができたときに、調べる時間がとれなかったこと」や「わからないまま授業の流れで進んでしまい、そのままになってしまったこと」については、児童から解消されたこととアンケートでの回答があった。児童一人ひとりのペースや興味に合わせた学習に共同編集が関わったことが要因であると考えられる。しかし、個人のペースに合わせることも必要であるが「単元一つ一つに時間がかかりすぎる」とや「児童によって学習の定着具合に差が出た」という課題が残った。これらの課題を解消するために、ループリックの目標を吟味するなど学びの漏れがない形

をもう一度検討したい。

### (2) 視点2について

実践1、実践2のいずれにおいても、グループ内で共同編集を行うことによって、自分だけでは調べきれないことも友達と交流しながら自分なりにまとめることができたことは成果の一つであるといえる。しかし、その一方で答えのバリエーションが制限されてしまったり、新たな考えが生まれにくくなったりしてしまうという課題が見えた。この課題については、どのタイミングで共有するかがポイントになると考えられる。いつでも共有できることが共同編集の良さでもあるが、初めから共有するのか、一人ひとりが自分の考えをもってから共有するのか、など目的を明確にして共有させる必要があった。今後の課題として取り組んでいきたい。

## 6 引用・参考文献

- 朝倉一民 (2018) 「主体的・対話的で深い学びを実現する！板書&展開例でよくわかる社会科授業づくりの教科書5年」, 明治図書出版株式会社.
- 古川俊 (2024) 「ICTで変わる算数授業 はじめの一步 1人1台端末を活かす授業デザイン」, 明治図書出版株式会社.
- 難波駿 (2023) 「超具体！自由進度学習はじめの一步」, 東洋館出版社.
- 横田富信 (2024) 「子どもの自己調整スキルを磨く」, 東洋館出版社.

### 注

- 1) Microsoft Word は、Microsoft 社が開発した文章作成ソフトである。
- 2) Microsoft Excel は、Microsoft 社が開発した表計算ソフトである。
- 3) Microsoft OneNote は、Microsoft 社が開発したデジタルノートアプリで、Web 上にメモを作成・管理できる。
- 4) Microsoft Teams は Office365 にあるチャットベースのワークスペース。チームを作り、簡単にファイルを共有し、Excel、OneNote などのアプリでの共同編集をリアルタイムで行うこ

とができる。

- 5) Microsoft Forms は、Microsoft 社が開発したアンケートを作成・集計するサービスで、無償で利用できる。
- 6) GeoGebra は、数学教育用の無料デジタルツールである。グラフや図形などの作成機能や操作機能がある。
- 7) Scratch は、MIT が開発した小中学生向けの教育ツールで、ブロックをつなげてプログラミングできる。

## 【1 年次研究】

ICT 活用を通して児童が自ら課題意識をもち、情報活用能力を高める授業実践  
大石田町立大石田南小学校 小 玉 絃 貴

### <研究の要旨>

本研究では、ICT 活用を通して児童が自ら課題意識をもち、情報活用能力を高める授業について考察した。ロイロノートのアンケート機能を活用し、課題をつかむための情報収集を児童自身が行うことでどのような効果が見られたか、共有ノートの活用が児童の課題意識にどのように影響するのか、そしてどんな情報活用能力がどのように高まっていくのかを検証した。

その結果、ICT を活用することで、児童によるアンケートの作成、調査、集計、提示が容易であり、児童が自ら課題意識をもつ一助となることが明らかになった。また、常に他者参照できる環境づくりにより、いつでも自分のタイミングで友達の考えや学び方を参考にし、よいところを選んで取り入れることができるため、児童の課題意識と情報活用能力の高まりの両方に影響することが分かった。さらには、課題が自分事であり、ICT を使う必要感や必然性があることが情報活用能力をより高める要因であることが明らかとなった。

キーワード：ICT 活用 課題意識 情報活用能力 授業実践

### 1 研究テーマ

筆者の勤務校では、研究主題を「くらしとまなびを自ら創る子どもの育成」と設定し、特別活動を中心とした学校研究に取り組んでいる。研究の視点の一つに「子どもが課題意識をもつための工夫」がある。これまで児童が課題意識をもつために、教師が様々な手立てを講じてきた。しかし、教師から課題を提示したり情報を与えたりしただけでは受動的になり、課題が自分事になりにくかった。そこで、ICT を活用することによって、児童自身で情報を集めることができ、自分たちの現状を自分たちで把握することが可能であるため、児童自ら課題意識をもつことが可能なのではないかと考えた。「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編」において、児童に「生きる力」を育むことを重視している。「生きる力」の一つに「いかに社会が変化しようと、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」を挙げている。また、「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編」は、「自ら課題を見いだしたり、解決方法を決めて自主的に実践したり、その取組を振り返り、よい点や改善点に気付いたりできるような学習過程によって、集団や自己の新たな課題の発見や目標の設定が可能となり、生活を更によりよくしようという次の活動への動

機付けとなるなど、児童の主体的な学びが可能となる」と述べている。これらは各教科等においても同じことが言える。このようなことから、主体的な学びを創るためにも、児童が課題意識をもっていることは重要なことである。

さらに、児童の学びを支える資質・能力として、情報活用能力がある。「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」は、情報活用能力について次のように述べている。

情報活用能力をより具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。

また、情報活用能力は、学習の基盤となる資質・能力であると位置付けている。しかしながら、教員の情報活用能力に関する認知は十分とはいえない。（小林祐紀ほか、2023）筆者自身、これまでの授業実践を振り返ると、情報活用能力の高まり

を意識した授業づくりが不十分であった。情報活用能力を高めることによって、児童は ICT の様々な機能の強みを理解して、情報を集めやすい方法や他者に伝わりやすい方法など、ICT の使い方を選択できるようになり、ICT を問題解決に生かすツールとして活用することができるようになる

と考える。  
本学級は第3学年であり、第1学年から iPad を使用している。前年度までの低学年段階では、ICT の利用場面はカメラアプリによる撮影とロイロノート<sup>1</sup>による資料の提出に限られていた。そのような実態から、筆者は児童が様々な機能を経験し、それぞれのよさを理解しながら、使い方を自ら選択できるようになってほしいと願っている。なぜなら、そうして育まれた情報活用能力を発揮させることにより、各教科等における主体的・対話的で深い学びへとつながっていくことを期待しているからである。

以上のことより、本研究では次の3点を明らかにする。

一つ目は、学習や生活において、児童が自ら課題意識をもつための効果的な ICT 活用のあり方である。二つ目は、情報活用能力を高めるための ICT を活用した授業実践のあり方である。三つ目は、多様な利用場面を設定することで個々がどのように ICT を活用できるようになっていくのかということである。

## 2 研究の視点

- (1) 児童自ら課題意識をもつための工夫
- (2) 情報活用能力を高める工夫

## 3 研究の方法と計画

### (1) 視点1について

これまでの、児童が課題意識をもつために教師が情報収集を行い、児童へ情報を提供してきた。それを児童自身が情報収集を行うことで、課題意識がどのように変容していくか研究していく。ロイロノートの共有ノート機能では、一つのノートに同時入力することができる共同編集が可能である。また、アンケート機能があり、アンケートの作成・回答・整理が容易である。思いを出し合

ったり、アンケートを実施して情報収集したりすることで、課題をつかむきっかけになると考える。

### (2) 視点2について

ICT の基本的な操作スキルを高めるために、今年度は学習者用端末で活用できる様々なアプリケーションや機能を学習や生活に積極的に取り入れていく。その際、教師による一方的な指示で ICT の使用を促すことよりも、児童の「使ってみよう」という想いを大切にしたり、児童からの「やってみたらこんなことができた」という経験を学級全体に広げたりすることを大切にしていこう。そして、操作スキルが高まり、ICT の使い方を選択できるようになることが情報活用能力の高まりにもつながると考える。

また、ICT を活用する際は共同編集できる環境を整え、お互いの学び方を即時共有することができるようにする。そのような活動を通して、どのような情報活用能力が、どのように高まっていくのかを研究する。

## 4 授業実践の実際

### (1) 実践1

#### ア 実践の概要 (10月実践)

(ア) 単元名 3学年 学級活動 (2) 「友達となかよく」 (イ よりよい人間関係の形成) (イ) 本時の目標 言い方は相手の気持ちに影響することに気付き、お互いの気持ちのよい言い方をするにはどうすればよいかについて話し合い、自分に合った取組を決めることができる。
---

#### イ ICT の活用について

学級活動 (2) では、導入「つかむ」・展開「さぐる」「見つける」・終末「決める」の学習過程で授業を展開している。事前指導として計画委員会を立ち上げ、教師の指導のもとで本題材を決定した。ロイロノートのアンケート機能を活用して、本題材に関わるアンケートの作成、調査を児童が行うこととした。そして集計結果を児童が Keynote<sup>2)</sup>にまとめ、本時の「つかむ」で計画委員会の児童から全体へ提示した。事前の

アンケート作成と調査，集計，提示の全てを児童が行うことで，児童自ら課題意識をもつことをねらった。

また、「決める」段階の意思決定では，ロイロノートの共有ノートに学習カードを用意し，各自が意思決定した目標を入力するようにした。意思決定に困った児童が，自分のタイミングで他者参照し，最終的に全員が意思決定できることをねらった。

### ウ 児童の学びの姿

児童が作成したアンケート内容は次のとおりである。

- ① 言われてうれしい気持ちになったことはありますか。
- ② それはいつどんなふうに言われましたか。
- ③ 言われて嫌な気持ちになったことはありますか。
- ④ それはいつどんなふうに言われましたか。

ロイロノートでアンケートを実施すると，回答結果がグラフや項目で瞬時に表示される。しかし，児童は自動的に作成された集計結果では，スクロールしなければ比べることができず，違いが見えにくいと判断した。



図 1. 自動で作成されたグラフ（上図）と児童が作成したグラフ（下図）

そこで児童は，Keynote で結果をまとめ直した。アンケート①と③の結果について，棒グラフを用いて並べて示すことで比べやすくなり，自分たちの現状に気付くことができた。

そして，それを本時の「つかむ」段階で児童が提示し，「さぐる」「見つける」の話合いへとつなげた。

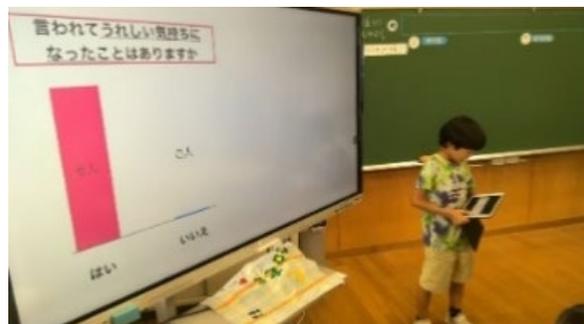


図 2. アンケート結果を提示する児童

計画委員会の児童は，アンケートの作成・調査・集計の段階で，自分たちの生活を振り返り，本題材の背景を考えることを通して，実際の教室での言動を想起しながら，「どうにかしたい」と発言しており，課題をより自分事にすることができた。また，集計結果をまとめるときに，以前は自動で作成された集計結果を提示するだけだったのに対し，伝えたいことを焦点化して整理しようとしており，情報活用能力の高まりも感じられた。さらに，本時の「つかむ」段階で，児童がアンケート結果を提示したことにより，自分たちの現状を知り，「このままでは学級目標に近づくことができない」という思いをもつ児童もいた。アンケートの作成・調査・集計・提示の全てが児童からの発信であったことが，学級の児童一人ひとりが自ら課題意識をもつ大きな一助となった。

「さぐる」「見つける」の話合いをふまえて，本時の終末では2週間取り組む目標の意思決定を行った。すぐに目標を決めることができた児童は，友達がどんな目標にしたのか確認していた。迷っている児童は，友達の目標を参考にしながらも，自分の言葉で目標を意思決定することができた。他者参照できる環境の設定により，自分のタイミングで友達の目標を見ることができた。安心感が生まれ，全員が意思決定することができた。また，決めた目標の共有も画面上で

行えるため、目標を発表する時間を取る必要がない。その分、なぜその目標にしたのかを問う時間に充て、考えの背景に迫ることもできた。

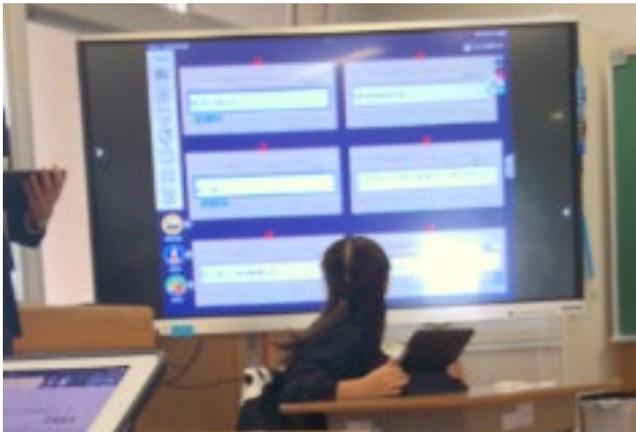


図3. 友達の意味決定を参照する児童

(2) 実践2 (9・10月実践)

ア 実践の概要

(ア) 単元名  
第3学年 特別活動  
「あおくんとくらそう」  
(イ) 単元の目標  
学級で協力しながら生き物を飼育することを通して、生命の尊さに気付くことができる。

イ ICTの活用について

本単元で登場する「あおくん」とは、理科の学習で校庭の生き物や植物を観察していた時に、児童が見つけた幼い蛇（シマヘビ）のことである。捕獲した蛇について飼育するかどうか児童と相談した。すると、「飼いたい!」という声が挙がり、満場一致で飼育する運びとなった。本実践では、教師の指示等によってICT活用を促したのではなく、児童が自らICTを活用した実践である。

ウ 児童の学びの姿

<情報収集>

飼うと決めたものの、児童はヘビの生態について何も知らないことに気付き始めていた。「かわいいし、私たちが見つけたから飼いたい!」と、そんな思いから、各々がiPadを持ち出し、蛇の飼育方法について調べ始めた。その際、検索して表示された画像だけを見て餌や住処を判断していた児童もいた。しかし、それでは飼育方法について詳しく知ることができな

いことや、得た情報が本当に正しい情報なのか判断できないことに気付き、インターネット上の情報や説明の文章をじっくり読んでから判断するようになっていた。



図4. 「あおくん」の家を作りながら、蛇の飼育方法を調べる児童

以前の児童は、インターネット検索で調べる際、画像ばかりに注目し、それが正しい情報だと決めつけていた。しかし、必要な情報を主体的に求め、複数の情報と比べることができるようになった。その要因は、「あおくんを大切に育てたい」という強い思いだと考える。自分たちが見つけ、最後まで飼うと決めたこと(自分事)、「何とかしたい」「知りたい」という思い(必要感)が情報活用能力を高めたと考える。

<まとめ・表現>

約1ヶ月半の間、飼育するための家づくりや観察、世話、そして今後どうするかの話合いを重ねる中で、児童の「最後まで飼いたい」という思いに変化が生じた。餌の調達が難しいことや寒さによって弱ってきていることから、「飼いたい気持ちはあるけれど、大切な命だし、かわいそうだから逃がそう」と決めた。そして、児童らは「思い出を残したい!」と、iPadを取り出した。iMovie<sup>3)</sup>の使用経験が乏しかったため、このタイミングで教師からiMovieについて簡単に説明をした。その後、iMovieで動画をまとめる児童やKeynoteでスライドにまとめる児童、ロイロノートでまとめる児童など様々だった。各々が思い思いに、「あおくん」との思い出を形に残そうとしていた。



図 5. iMovie で動画を作成する児童



図 6. Keynote でスライドを作成する児童

「お別れするのは悲しいから思い出を残したい」という児童の強い想いからスタートし、必要感があったからこそ ICT 活用の幅が広がっていった。つまり、自分事であり、必要感があることが情報活用能力を高めるために必要な条件であると考えます。

また、ICT を活用し、自分が望む思い出の残し方を実行できたことで、別れの寂しさだけでなく、「あおくん」とともに過ごした日々を実感し、自信や満足感も得ることができた。

(3) 実践 3 (12 月実践)

ア 実践の概要

- (ア) 単元名  
第 3 学年 算数科 「重さ」
- (イ) 単元の目標  
重さの単位やメートル法の単位のしくみについて理解し、適切な重さの単位や計器を選び、重さを測定したり表したりすることができる。

イ ICT の活用について

ロイロノートの共有ノートに重さの測定結果を記録するシートと振り返りを記入するシートを用意した。測定の際には、量感を身に付けるために必ず重さの見当を付けてから計器を選択したり、測定したりするようにした。また、毎時間の測定結果と振り返りのシートを一つの共有ノート上に蓄積していくことで、児童が自己の学びが積み上がっていることに気付いたり、学びの変容に気付いたりすることをねらった。

ウ 児童の学びの姿

児童は身の回りの物の重さについて、前時までに身に付けてきた 1g や 1kg の量感を基に、適切な計器を選択して測定し、計器と測定結果を共有ノート上のシートに記入していった。適宜他者参照しながら測定していた児童は、自分と友達の結果に大きな差があることに気づき、再度測定してみる姿が見られた。測定を繰り返し、より正確な測定技能を身に付けていくことができた。教師の言葉がけがなくても、誤りに自ら気づき、再測定してみようという想いになったのは、他者参照できる環境があったからだを考える。児童がよりよく学ぶために、選択した計器ごとにシートを色分けしていれば、互いの違いに一目で気付き、思考を広げるきっかけをつくること

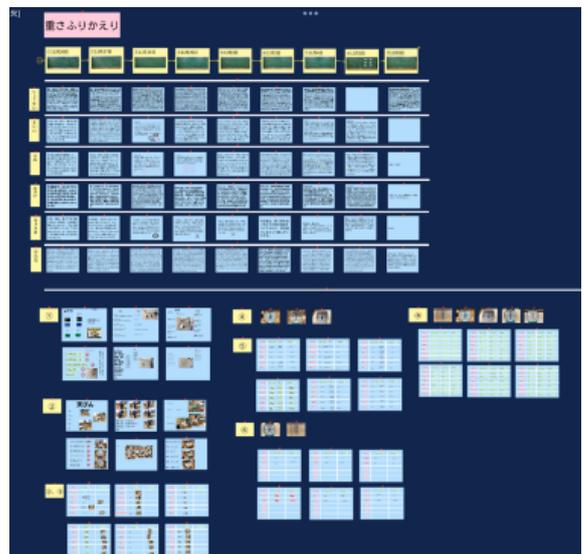


図 7. 振り返りの蓄積 (上部) と学習内容の蓄積 (下部)

もできたと考える。

また、単元を通して振り返りを蓄積し、自分と友達の振り返りを一目で読み返すことができたことで、書く量が格段に増えていた。これは、他者参照できる環境により、自分のタイミングで友達のよい書き方を取り入れていったからだと考ええる。課題に迫った内容を取り上げて話し合ったり、振り返りの視点を与えたりすることで、今後さらに内容が深まっていくと考える。

#### (4) 実践4 (10月実践)

##### ア 実践の概要

###### (ア) 単元名

第3学年 体育科

「器械運動～マット運動～」

###### (イ) 単元の目標

- ・基本的な技を行ったり、繰り返したり、組み合わせたりすることができる。
- ・自己の能力に適した課題を見つけ、技ができるようになるための活動を工夫したり、考えたことを友達に伝えたりすることができる。

##### イ ICTの活用について

ロイロノートの共有ノートにその日の目標の記入と自分の動きを撮影した動画の貼付、振り返りの記入を行うシートを用意した。そして、毎時間記録していき、学習の記録として蓄積し、自己の変容や成長に気付くことができることをねらった。また、教科書を共有ノートに載せておき、いつでも見ることができるようにした。技のポイントを随時確認し、自分の動きと比べながら練習することで技の習得をねらった。

##### ウ 児童の学びの姿

児童は練習する技や意識することを目標としてその都度記入し、練習に入っていった。安全面を考慮し、二人組での練習とした。教科書のポイントを見直して、声をかけ合いながら練習する姿や、動画を撮り合い、よさを伝え合いながら練習する姿が見られた。

振り返りの際は、前時までの動画を見返したり、ポイントと比べたりしながら記入し、自己の変容に気付くことができていた。一つの共有ノート上には、教科書の写真や自分と友達の動

画、振り返り等、多くの情報がある。その中から必要なものを自分のタイミングで選択して学ぶことができることが共有ノートのよさの一つである。



図8. 教科書のポイントを読む児童



図9. 技を撮影し合う児童

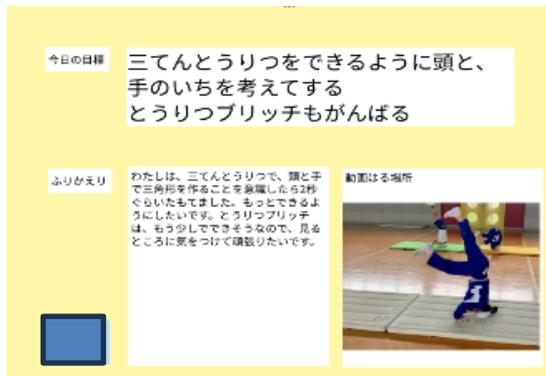


図10. 毎時間の振り返りシート

## 5 到達点と今後の課題

### (1) 視点1について

特に有効だと感じた活用は二つある。

一つ目は、実践1のようにロイロノートのアンケート機能を活用して、課題をつかむための情報収集を児童に委ねることである。教師の適切な指導の下で、自分たちの現状を把握するためのアンケート内容を児童が考え、アンケートの作成・調査・集計を行う。ロイロノートは操作が単純なため、第3学年の段階であっても、それが可能であった。児童自ら課題に気付き、考え、調査し、主

体的に結果を提示したからこそ、全員がより自分事になり、生活をよりよくしようと取り組むことができた。

二つ目は、実践3・4のようにロイロノートの共有ノートを活用した、学習内容や振り返りの蓄積である。毎時間の学習シートや実験・測定の記録、板書、振り返りを単元ごとに一つの共有ノートに蓄積していった。その結果、これまでの学習の過程や振り返りを自分のタイミングで自ら見返し、前時の学習を生かして考えたり、改善したりしようとする姿が見られた。また、いつでも友達の様子や振り返りを見ることができるため、主体的に友達のよいところを自分の学びに取り入れようとしたり、もっと詳しく説明を聞きに行こうとしたりする姿が見られた。学習や振り返りの蓄積と、いつでも他者参照できる環境づくりも、児童が自ら課題意識をもつための大きな手立てになっていた。

## (2) 視点2について

「情報活用能力」といっても、その内容は多種多様である。今回の研究で特に高まりを感じたのは、情報を収集する力とまとめたり、表現したりする力である。その要因として二点ある。

一点目は、様々な学習や生活の場面でICTを数多く活用したことによって、児童が基本的な操作スキルを身に付けたことである。カメラアプリでの撮影が主な使い道だった児童が、使用方法や使用場面を増やしたことで、ICTを活用することのよさを知り、使い方を選択できるようになった。基本的な操作スキルを身に付けていく中で、いざ「知りたい」「わかりたい」と思う場面に出合ったとき、児童はICTや書籍等を活用して情報を集めようとする。その中で、複数の情報を比較したり、問題解決に生かしたりする必要性に気付いていく。情報収集したことを、相手意識や目的を明確にした上でまとめたり、表現したりする際にも、様々な機能を経験しているからこそ、伝える相手や目的に合った方法を自分で選び、まとめようとする姿が見られた。一方で、伝える相手や目的を考えながらまとめていく中で、操作スキルを広げていった時もあった。

二点目は、常に他者参照できる環境を整備した

ことである。いつでも、自分のタイミングで友達の考えや学び方を参考にして、必要なものを取り入れる。このことも情報収集の力を生かしている場面だと考える。

これらのように、iPadを学習道具の一つとし、日常的にICTを活用して、基本的な操作スキルを身に付けていくことが、より高次の情報活用能力を高めていく支えになると感じた。

## (3) 情報活用能力がより高まる条件

実践2で紹介した「あおくとくらそう」を通して考えたことがある。それは、ICTを活用する際に、課題が自分事であり、ICTを使う必要感や必然性があることが情報活用能力をより高めるのではないかということである。教師が指示して教えたスキルよりも、児童が自ら必要感をもってICTを活用し、自ら得たスキルの方を、その後の学習でも生かそうとしていた。自分事であり、必要感があるからこそ、第3学年段階であっても学習道具として日常的にiPadを使うことができるほどにICT活用の幅が広がっていったと考える。

## (4) 2年次研究に向けて

1年次研究を通して、児童のICT活用の幅を広げ、情報活用能力を高めることができた。しかし、課題も残った。それは、高めた操作スキルや情報活用能力を教科や単元の本質に結びつけることである。身に付けた情報活用能力を生かせば、ICTを活用して教科や単元の本質に迫ることが可能であると考えられる。2年次研究ではその点を軸に置き、教科の見方・考え方を引き出すICT活用を探っていききたい。また、児童の変容に注目して研究を進めていきたい。

## 6 引用・参考文献

- 樋口綾香(2023)『『自ら学ぶ力』を育てるGIGAスクール時代の学びのデザイン』、東洋館出版社。
- 情報活用能力育成調査研究委員会(2022)「情報活用能力を育む授業づくりガイドブック」、一般社団法人 日本教育情報化振興会。
- 情報活用能力育成調査研究委員会(2024)「理論と実践でわかる 情報活用能力を育む授業づくり 情報活用能力ベーシックを活用した授業

事例集」，一般社団法人 日本教育情報化振興会。

小林祐紀・秋元大輔ほか (2023) 「学習過程に関連づけた情報活用能力育成のための授業指標の開発と評価」， AI時代の教育論文誌 第5巻， AI時代の教育学会， pp. 60-67

文部科学省 (2018) 「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総則編」， 東洋館出版社。

文部科学省 (2018) 「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別活動編」， 東洋館出版社。

高橋純 (2022) 『1人1台端末を活用した高次の資質・能力の育成のための授業に関する検討』 日本教育工学会研究報告集， 日本教育工学会。

#### 注

- 1) ロイロノート・スクールは，株式会社 LoiLo が開発した授業支援クラウドである。教材配付や画面配信，回答共有，共有ノートによる共同編集等の機能がある。大石田町の児童生徒全員に ID が付与されている。
- 2) Keynote は，Apple が開発しているプレゼンテーションソフトウェアである。
- 3) iMovie は，Apple が開発しているビデオ編集ソフトである。

---

---

2025 要 覧

---

---

令和7年5月発行

発行 北村山視聴覚教育センター

〒995 - 0035

山形県村山市中央一丁目3番6号

TEL (0237) 55 - 4211 (代表)

(0237) 53 - 0695 (貸出)

(0237) 53 - 0696 (広域)

FAX (0237) 55 - 4959

HP <https://www.kavec.ed.jp/>

e-mail [k-center@kavec.ed.jp](mailto:k-center@kavec.ed.jp)

---

---



## 北村山視聴覚教育センター

